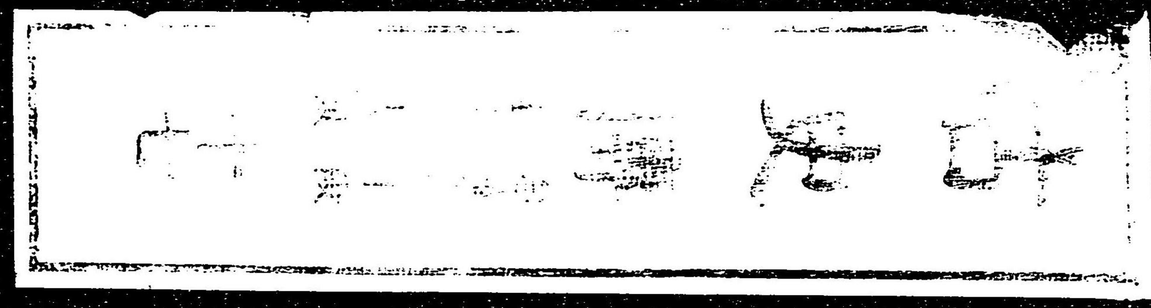
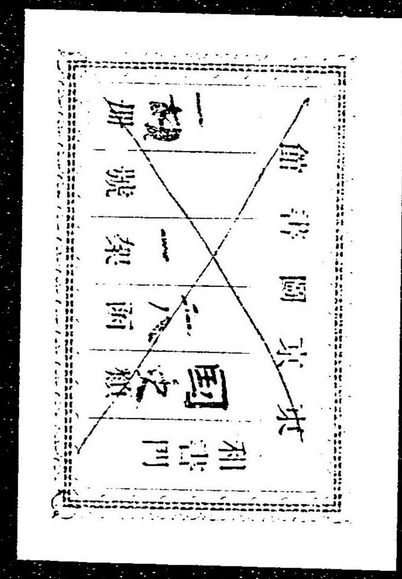
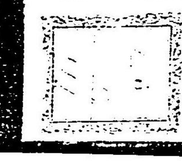
古史傳

十七

195
34
111




館書圖京東
和漢門
一
一八六冊
一
架函號
珊



宮内省圖書寮

七卷

神代中九卷

平篤胤謹撰

男 鐵胤
孫 延胤 續攷

故其大国主神出庶兄弟八十神坐矣。雖然皆国者奉避於大国主神矣。奉避由者。其八十神

各欲婚稲羽出八上比賣出心（オノモクヨバハム イナバノ ヤガミヒメヲノコロ）
有而共行稲羽出時於大名牟（アリテトモニユキイナバニケルトキニオホナム）
遲神令負伺爲從者而率往矣（ヂノカミオフセフクロヲレトモビトトテヰテユキキ）
於是到氣多出前時裸出菟伏（コヽニイタルケタノサキニトキニアカハダナルウサギフシ）
也爾八十神謂其菟云汝將爲（タリコヽニヤソガミイヒソノウサギニケラクイマシセム）

者浴此海鹽當風吹而可伏高（ハアミコノウシホヲアタリカゼノフクニテテヨトフシタカ）
山出尾上云故其菟從八十神（ヤマノヲノヘニイフカレソノウサギヽニヤソガミ）
出教而伏矣爾隨其鹽出乾而（ノヲシフレテフシキコヽニヽニソノシホノカワクニ）
其身皮悉風見吹拆出故痛苦（ソノミノカハコトゞニカゼニエフキサカレカラニイタミ）
而泣伏則最後來出大名牟遲（テナキフセレバイヤハテニキヽセルオホナムヂノ）

神見其菟而問言何由汝泣伏
(カミ ミ ソノ ウサギヲ テ トヒタマフニ ナゾモ イマシ ナキフセ)
耶菟答白吾在淤岐嶋而雖欲
(ルトウサギマヲサク アレ アリ オキノシマニ テ ドモ ホリツレ)
度此地無將度因出故欺海出
(ワタラマクコノクニニ ナカリ ム ワタラ ヨシレ ユヱニ アザムキ ワタ ナル)
和邇而言出吾與汝欲競計族
(ワニヲテ イヒケラク アレト イマシ テム クラベ トモガラ)
出多少故汝者其族出在悉率
(ノ オホキ スクナキヲカレ イマシ ハ ソノトモガラノ アリノコトゴトヰテ)
來自此嶋至氣多出前皆可列
(キテ ヨリ コノシマ ニ マデ ケタ ノ サキ ミナ テヨ ナミ)
伏度吾蹈其上而走乍將讀度
(フシワタリアレ フミ ソノ ウヘヲテ ハシリツ、 ム ヨミ ワタラ)
於是與吾族將知孰多事如此
(コ、ニ ト アガ トモガラ シラ イヅレオホキト云コトヲ カ ク)
言則見欺而列伏出時吾蹈其
(イヒシカバ エ アザムカ テ ナミフセリシ トキニ アレフミ ソノ)
上而讀度來今將下地出時吾
(ウヘヲテ ヨミワタリキテ イマ スル オリムトツチニ トキニ アレ)

云汝爲我見欺焉竟則。卽伏最端和邇。捕我而悉剝我衣服矣。因此而泣患則。先立行出八十神出命以而。浴海鹽。當風而伏焉。誨告矣。故如教爲則。我身悉見傷焉白矣。於是大名牟遲神。教其菟曰。今急往此水門而。以水洗汝身而。卽取其水門出蒲黃。敷散而。輾轉其上則。汝身如本膚。必可差者也教矣。故如教

爲則。其身如本也。故其菟白大名牟遲神云。此八十神者。必不得八上比賣。雖負佐。汝命獲出白矣。此稻羽出素菟者也。於今謂菟神也。

庶兄弟ハ麻〻、阿邇於登と訓ばし。字鏡ふ。庶兄万〻兄ぞあ已。麻〻ふ庶字を書こゞ。師説ふ。漢国ふて。庶字ハ嫡ふ對ふる称ふして。嫡妻の生る子を嫡子と云ひ。妾の生は庶子といふ。さきむ庶兄弟とも。嫡妻の生る子も。妾の生る兄弟を云称ふり。然れぞも皇国ふてハ嫡庶を論ぜ。凡て異母の兄弟を。麻〻兄麻〻弟と云ふむ。まと和名抄ふ。継父万〻知〻。継母万〻波〻を見えはと古も今も。非所生子を麻〻子と云ひ。今言ふ。非所生親子の間を。麻〻志伎中と云已。をあり。偖此一段ハ。都て師説をもて注せ。更ふ師云とハ記さ。ゝ。ふ万〻已ゞ注せるをバ。篤胤云と記して別ち於。

○八十神ハ。師云。多妃を云先已。必八十柱と限ふ。ふは非じ。明宮段末ふ。故八十神雖欲得是伊豆志袁登賣。皆不得婚と。而ふ同じ。考合せて知ばし。神代紀ふ。八十諸神。垂仁天皇紀ふ。八十魂神。おとも而已。はと百八十神と下ふ。有るも。同じ。ぐひあり。式ふ阿波国美馬郡ふ。八十子神

社とあるは。前後の神社を合せて思ふよ。伊邪那岐大神
れ。多くれ御子を申しあらむ。（ちて舊事紀ふ此の八十神を事八十神とて一神れ名おもとなれ。例れひゞ事あり。次文ふ皆とも各とも共議とも有ふてもるし。）○皆国者奉避於
大国主神矣。師云。おは後の事を先言おきて。次ふ其然なる
所以を。初よ已具ふ言ふ。（此次より下文の毎坂御尾追伏毎河瀬追撥而国作始矣とある処まで皆その事あり。）皆れ。八十神皆おに国れ。此天下を云。避とは。
下ふ大国主神の事ふ。避てふおゆれ許多ての法れ。自退て。
譲に避をおを云法よ。此は下文の事ども戎見るふちよ
非ず。競争おれども及ずして。負て退き避れ法おに。（若くれ終よ大
国主神よ帰服て。自避し事の有しゞ。記ふ漏おるふもや有らむ。）○稲羽れ。師云因幡国お

に。彼国法美郡ふ。稲羽（伊奈波）郷あきれ。是を已出と法国名
れ法ばし。名義れ。稲葉を已や出れむ。○八上比賣。師云和
名抄ふ。因幡国八上（夜加美）郡あに。此を已出おる名おに。（まれ此比賣神の坐し処ある故ふ地名とあれ法ゝ其本末れ辨へがとし。万葉四よ八上采女も見也。）○欲婚
云くは。師云用婆波年能心有氐と訓法し。此言は。八千矛
神れ御歌ふ。佐用婆比と石の法處ふ委く云べし。（第九十八段の傳見ば
し。）○共行れ。出雲国を已行おに法べし。○令負帯は。和名抄
ふ蒋魴切韻云。袋囊名。字亦作帯和名布久路。まと唐韻云。
勝囊之可帯也。和名於比不久呂。おまら共ふ。行旅具ふ載
とれば。古は旅用物を帯ふ入て。従者よ齎せ行と見えと

卍。蜻蛉日記あどふ。餌袋は鬃子あど入て。旅はもとる事見えさり。餌袋の名は。鷹をり出おら。免ど。其ふ種〻物入ふ〳〵は。古れ旅ふ。袋を持ある事の遺れふあるべし。西宮記踏歌裝束條ふ。以衛府官人爲持袋者。裝束如常と見え。まと禁秘御抄得選條ふ。行幸之時持大袋与内侍同車。是不可然事。第一也と云り。雄畧天皇紀ふ。根使主を罪ふひ給ひて。其ゞ子孫を賜茅渟縣主爲負囊者と云卍。賤者は役と見え。卍。或人云事功の人ふおく〳〵者ふ世俗ふ袋持と云も。此故事ふ依まり。○從者ハ登毋毘登と訓ばし穴穂宮段ふ御伴人ともあ卍。書紀ふ從とも從人とも。嫌人ともあるふ皆ト。モ。ビト。ゞ訓と卍。賤きけ万ふ見役給へふ所由は。凡て大れる功業を立む。ゞ。ふ人は。細事ふて拘らぬのら。中〻ふ人の云ふ〳〵ふ

從ふ物ふまゞ邪ふ依ばし。此意は。次の手間山は事ふても見えあ卍。○氣多之前は。因幡國氣多郡は海邊の崎ふ卍。○裸之は。阿加波陀那流と訓べし。垂仁天皇紀ふ。裸伴此云阿箇潘娜我等毋と見え。雄畧天皇紀ふ。禿鷄とも見も。○今云本ふて之字ふきを今て此訓のナルふ當て加牙ば。古紀歌ふ阿加波陀能山と。ぬと処卍。顯膚は意ふ卍。ふと赤膚ふても有ばし。史記秦始皇本紀ふ伐湘山樹赭其山とあり。まと波陀加と云て。膚顯ふて。阿加波陀を下上ふ云。言ふ卍。然るを阿加波陀加と云は。此を意得ぬひゞ言ふて。由れく同言の重ふるぞうし。右引る垂仁紀訓注の我字は。之の意ふり。思ひ誤るふと。此は菟の毛は無を云卍。○菟。此方は古書ふは。兎を多くは菟と作卍。漢籍ふもちる例ふりて。字書ふも相通と云るぬ有れど。そは誤ふりと或書ふ

云卍、菟を兎とは作ばく、兎を菟とは書まじきなり。卍をぞ信ふちも有べき事あり。　加茂翁云。万葉十四、東歌ふも。今は田舎人も乎佐藝と言ばぞ。然訓べしと云き。然れど凡て古書ふ。宇は假字ふ。此字を用ふ例を思ばぞ。形不宇佐岐ぞ正しかり。天武天皇紀ふ。置始連菟と云人名をも。元正天皇紀ふ宇佐岐と書れ。卍。乎佐岐は本なり。田舎言ふるべし。和名抄ふ。四聲字苑云。兎似小犬而長耳缺脣。和名宇佐木と。卍。篤胤云。此了引れと。和名抄は。常は印本ふ。古本ふは。兎。他故反、亦作菟。和名宇佐岐。似鼠大長耳缺脣。毛可爲筆と。卍。此よりも菟兎通はし用ふる。ふを知ばし。字書ぞもふ菟娩ふどの字。与兎同とも。兎子也とも見えまと。菟字も兎子也ぞ。卍。かく

て此、獣のこと。猶末ふ委く云べし。○爾八十神謂其菟云云。此上ふ。菟は裸ふて伏る所以を。八十神の問る言。次ふ菟は答へ。ふ言ふど有ばき。其は次の大名牟遲神の問賜へる處ふ。委曲ふ舉て。此ふは省々卍。抑前ふ言て後ふ省ふぞ。文章の常ふ。此は前ふ省は後ふ言ふは。凡て大名牟遲神の事業を主と語ふ故ふ。其処を委曲ふ云ふ。○將爲者は。勢牟波ぞ訓ばし。可爲樣者と云むぐ如し。○海鹽は宇志富と訓ばし。塩は借字ふて淖をいふ。下同。齊明天皇紀の大御歌ふ。于之哀ぞ見ば。○尾上の去ぞは。朝倉宮段ふ云べし。○可伏は。今云。本ふ伏字はみふ卍。其を師は布斯氐余と訓れ。ふる氐余ふ當て。可字を加ふ。○從八十神之教而の而は。爲而は意

ホ卍。○乾の假字は。字鏡の燥字に下ホ可和久ゼ石の卍。○其身皮とは。膚を云ホ卍。其故に。上ヨ裸と見え。下文ホ悉剝我衣服ゼ石のれど。毛に付とる皮に無れど形め。○痛苦は。伊多美氐と訓べし。抑ホの菟は。八十神に為米ヨ何の怨仇ホらぬをかく今惱るに。甚も惡有神とち也ゝ卍。凡て由ホきに沙ふみホ物を傷ふことは。昔も今も不善人の為る事ホりゝし。○最後は。伊夜波氐ゼ訓ぢ支由前ヨ云ゲ如し。第二十段の傳見べし。○淤岐嶋に隱岐国ホ卍。○和邇。和名抄ホ。麻果切韻云鰐似鼈有四足。喙長三尺甚利齒。虎及大鹿渡水。鰐擊之皆中斷。和名和仁と云卍。今云。斷。字古本ホに折と石のり。此魚に古と。古書ホ多く見め。宇治拾遺ホ虎の海

ホ落入ゝる足を。和迩の喰切ゝるを。其和迩ヨひホ虎ヨくひ殺されとホ物語をせとり。○今云。この事拾遺ヨ卍に古く。今昔物語ホ見え為卍。まと同物語ホ。私市宗平と云相撲人の最手ホりれるゲ。背を射られとホ鹿に。海を渡りて。向に山様ヨ逃けホを。宗平立游をして。鹿ホ追付て。其尻足を取て。肩ホらゝて游返るホ。鰐の追來れど。二度ヨ。鹿に頭と前足とを噛せて。三度めヨ。宗平。鹿の尻足を。鰐の口ホ入ホ。其腸ホ手を指入れて。但ホおりて。其鰐を。陸様ホ。投上とるを。人く集りて射殺し。斯て宗平ヨ。何ホし。噛れざりヨ。問ゝまど。鰐に物を噛て。其処ヨ多噛。安して。已ゲ。櫃ホ置て。其残ある。ゑまと噛ホ來るホり。其を知て。前度ヨ。鹿の頭を噛せ。次度に前足を噛せて遣めヨ。後ホ來れるホは。尻足を噛せて投上とり。窠内を知ざる者に。一度ヨ手を放ちて噛しむる故ホ。次度に我噛ホ。おめ。又カホき人に。指遣りて噛せむ程ヨ。必突倒れホむ。とぞ云ゝる。と云事も有卍。此魚のこと。書等ホ多ゝまど。此に人の心付ホも成べき事ホれど。文を畧きて注し出ヨ。甚大ホ有と見えて。記中ホ。八尋和邇ホゼ石の卍。漢籍ホも。長三丈ホど見め。凡て北

国の海ゐた。今も和迹多しと云ひ。まと遙はと熊鰐とは。西は外国くよりも此魚多き処ありと云ひ。凡て熊某を云た。みゐ猛を云る例其猛を云る稱ゐ。凡てゐること。上熊曾の処より云ゲ如し。ちて此ゐ海と云ゐた。菟ハ陸の物ゐて。海を渡らむの謀を語る處ゐまぢ形。○族た登母賀良と訓べし。此字書紀より宇我遲。まと夜加羅と訓れども。此た親族を云より非まぢ。然は訓べのらぢ。菟の族を云た。闘嶋の菟ぢも皆をいひ。和邇の族とは。舉海ハ和邇ども皆を云るおれぢゐ。書紀十一より。虹之黨類。まと諸虹族とゐゐも同じ。族た礼より。属類。黨類。徒黨。同伴者。衆ゐどみゐ然訓ゆ。○多少は於本伎須久那伎と訓べし。○欲競計をば。久良辨氐牟と訓べし。○在悉た。阿理能許登碁登と訓べし。有限不遺を云意ゐ。万葉五より布可多衣。安里能許等其等伎曾倍騰毛とあるゐ等し。○列伏度ゐの度た。此處と。彼處まで續くを云。彌亘字を訓る意ゐ。○走乍。凡て乍字。古書ゐは必都くと訓む例ゐゆ。都くは此事と彼事と相交ると。其間ゐ置く辭ゐ。此た走もし讀もして。二事を相交て爲る。凡て。走くは讀とも走りゐから讀とも云より同じ。故この乍字を。後世ゐた。那賀良とも訓あり。凡て都くを那賀良と。通ひて聞ゆるこを多し。物語文れどより。必都くと云べきを那賀良と云へる例あり。○近世の哥ゐ。而を云ゐきを。都くを誤こと多し。ゐた誤ゐ。都くと云べきを。氐と云むた可し。氐を云ゐきを。都と云ゲとし。此意をよく辨ふべし。近世ゐ。○將讀度。哥作人のいふ都くの説た。叶た如こと多し。讀た數計ゐ。万葉四ゐ。月日乎數而まと七より浪不數爲而まと十一ゐ。時守の打鳴ゆ鼓數見れぢ。これら今本の訓た皆誤まり。

はと十三ふ。吾睡夜等を讀も敢むりも。今本に讀を続と誤まる。はと十七ふ月日餘美都追。かく假字ふめ書る。今世ふも錢ふぎを數ふるをば。くむと。ぞ云ふ。ちて此度に上ふはと異ふして。渡行字を云ずり。

○與吾族云く。右に如く爲ふらむふは實ふ和邇の族に數をば。知ぎれども。菟の族に數に知ぎきふら祐ず。此上ふ。然後吾亦族在悉率來將列伏爾汝云く讀度ふど云語も有べきふ。其に今菟に身上を語るふ用無きず。畧ふふこそ。○今將下地之時。凡そ今と云ふ三意有る。一ふは。字に如く常云ふ今ふる。二ふは今一ふど云て有ず上ふ猶添むとるを云。三ふに將然こを近ふを云。俗ふやず

てとも。ふ。今返來むふど云是る。此ふまと同じ。即今ふとも云れ。一ふ意あり。今早くを催安ふいふ是ふ。まと今者ふは。と云て。今に此ぞ限と云意ふ用ふること有る。其意ふて。地ふ下むをるる程の近きを云。下地をは。和邇の背上ふる。氣多前の地ふ下るを云。○最端も。伊夜波志を訓ぎし。俗ふ一端と云ふと知る。○我衣服とは。毛に付ふ皮を云ゆ。ふは人ふ準ずて。衣服とに云るゆ。又は伎母能とに。凡て膚を裹ふ。み藏ふ物の名ふて。人の著る衣服にみの名ふに非るゆ。まふ蛇の伎奴と云こと有れず。此も伎奴を訓べし。○患に假字に。三代實錄十三の十七葉。ふ。憂禮比とるる。宇禮閉ふ非ず。

○命以に。以御言ふる。初ふ天神諸命以とるふ同じ。○見傷焉は。上ふ

其身皮悉風見吹拆之故痛苦とゐゐを云ひ。曾許那波延都と訓べし。但し此も記傳の説あるゞ。本よた傷字ぢみあひしを。如此訓まと依延都ふ當て。見易の二字を加へた。○今急おの今は。速くと催し起る意あひ。○以水洗た。淳氣を去む為ふ。眞水ふて洗はしを依あるばし。上ふ云る如く。水門た河の海ふ落る戸口ふて。河と海を の交際あ依ゞ。此た眞水を用ひむ為ふ。水門と云る処を む。河方へをひて。淳の交らぬ所と安依し。然らで為ゞふ 河とこそ云べきを。混たしく水門を云るた。いゝふと云 ふ。此処は海辺あきむ。○蒲黄。和名抄ふ。唐韻云蒲。草名。似 蘭可以爲席也。和名加末。陶隱居本草註云。蒲黄。蒲花上黄 者也。和名加末乃波奈と云ひ。蒲黄た。花上の黄粉あるを。直ふ波奈と云るた。此方ふ 天た。別ふ黄粉の名た無くて。其をも花を云依あるべし。 さて漢籍ふも。蒲黄ハもはら治血。治痛藥を安為た。本此

神の靈ふ賴て。上代をり。然傳ふし物あり。○今人た。加を 濁りて。賀麻といふゞ。凡て頭を濁る言ふし。今も蒲生と 云地名あぜは。清を以て古へを知べし。○輾轉則た。許伊麻呂毘氏婆を訓依 し。氏婆ハ。多良婆の意あり。万葉三卷ふ。展轉と見也。十卷まと十三卷ふもあり。許 伊た臥伏を云てはと万葉ふ反側臥有あどめ多く見也。 假字は許伊ふ。此も万葉ふあひ。あ本此言の例た。遠飛鳥宮段れ哥。許夜流と 有る処ふ云。○如本膚和名抄ふ。膚體肌也。和名波多とあひ。雪異 記ふ。膚加波辺。字鏡ふ。肌膚也。加波辺。和名抄ふ。肌膚肉也。 和名加波倍あど有まど。あ本波陀と云るふと。古言ふ多 ゝまば然訓べし。本膚を た見吹拆と依ゞ差合のみあらば。皮も 毛め。本此如くふ成を云あひ。○可差者也た。今云。伊延那 牟毛能敘と訓依し。差は愈ふ。本よた差字のみあるを。師れかく訓れと依ふ據

て可者也の三字を加ふ。○如本也は本之如爾爲伎と訓ばし。さまを藥方の物ふ見えと侯始ふ。書紀ふ此神を少彦名命と。蒼生はと畜産の爲ふ其病を療ぶ方を定給ふ事ふ。世人病まあ傷ふどを治絶むとせず此神の恩賴ふ仰ぐふ如事形し。今も鳥虫ふぎて身の病まと傷痛ふどある時幽ふ此神の靈ちはひ賜ふふ治むる方を自知て為るふ速ぶく驗ふ侯て。已ぐちゃしら心以て理ふ溺とる。漢の方ふ用るのらふ病も何も治まること希ふり。漢の方も上代て理ふ泥ぶて古の傳ふ任せてせしわぎふ驗炳焉ゃりしは自此神て靈ふ賴し。ふ。○其菟白云く。此言て如く果して。八上比賣をば大名牟遲神の得給ふ侯て。此菟の靈幸ひふ侯ばゃまず實ふ神ふゆゃ。○汝命ハ。那賀美許登と訓べき由上ふ云侯ぐ如し。さて此下ふかれら云辞を読付べき処ふり。曾と○稲羽之素菟ぞは。此故事を語る時の名目ふ侯ぬし。然らざれば次ふまと謂菟神とある重ふりて。いかが形ぬ。ちて此菟て白ぬ。ぬし事て。上文ふ言ぶして。此處ふしも俄ふ素菟と云侯て。いち〳〵の心得ぬ書ざはふ。故思ふ。素て也くは裸の義ふは非じゃ。若然も有らず。志呂とは訓まじて異訓ふ。人ふ考ふて。塵添壒嚢抄ふ因幡記と云書を引て此兎の故事を記せる。此記の趣と同じ。但し其始て高草郡て竹林て竹の中ふ老と兎住ゃるふ。ゆる時洪水いで來て此竹林流れふき兎竹の根ふ乘て流きて隱岐島ふ著ぬ。水ゃさ落て後本て所ふ帰らむとにれど渡るべきに侯ふし。其時ふ水中ふ鰐ゆめ兎鰐ふ云やう云く。是より後の事て此記と同じ。因幡記と云て風土記ふぎを云るふや。○謂菟神。ふて此神社今も有やゃ。くはし

く国人尓尋ぬべき事なり。伯耆国人の云く、本国八橋郡東積村に鷲大明神と云あり。須佐之男命を祭ると云。同村に大森大明神と云あり。大名持命を祭ると云り。件両社の神主細谷大和と云ちて、其鷲大明神を疱瘡の守神なりと云て、其わたりの諸人あふぎ尊みて、小兒の疱瘡の軽からむ事を祈る。まづ初に此願を立るときに此社に詣て、竹皮の笠を一蓋借て帰りて、家内に斎ひ置て、その兒疱瘡を事なく為をへぬれば、賽に同じさまの笠を今一蓋添て、初のと共に、かの社に返し納奉る。此笠どもはみな神の御前に積置をまと、後に祈かくる者は、一蓋づゝ借て帰るなり。さて其東積のあたりに木江川とて大河ありて、其川の海に落る処、塩津浦とて隠岐の知夫里湊その向ひに当れり。さて因幡の氣多郡は伯耆の堺にて、東積村とは五六里隔たれりと語りき。此因幡の氣多前とあるには合ざれども、若は莬神は此社にて、鷲とは莬を誤りたるならむか。疱瘡を祈る神も、此段の故事に縁ある事なり。和名抄によるに、東積郷は汗入郡なるを、八橋郡なるは、今は八橋郡に屬すなるべし。さて彼木江川の落口塩津と云地、蒲黄を取し水門ならむか。猶よく尋ぬべし。貝原好古が和尓雅

てふ物に伯耆国素莬大明神と云を載たるも、彼社を云るにもや有む。と言れするぐ。追継の考に、出雲国意宇郡大庭神魂社神主秋上得国云、素莬神は、今も因幡国高草郡の海邊内海村に白莬社とて有り。今は高草郡なれども、氣多郡に並びて氣多崎の内なり。かの伯耆なる鷲大明神と云は、出雲大社にも同名の社ありて、疱瘡を祈る神なり。莬神は其には非ず。○今云、杵築大社記に、鷲宮は俗に素盞烏尊の妾にて坐すと云に、昔兒童に託して、我を祈らば疱瘡の患を免れむ有しとなり。疱瘡守護神となれと云へり。ぞ云へりきと有り。○此條に免れ言語へるを始め、下に谷具久鼠なども言語したる事あり。猶神世に然る類の多かるを、人の甚く不審み思ふめるは、幽顯の理を熟悟り得ざる故なりけり。幽顯の差別のことは第百廿

三段の傳ふ委く注安を見るべし。其はまた鳥獸万物も元よりと深き所以ありと見えて。神ふ屬く物ふし有まば。幽顯いまゞ分れざりし。大国主神の御世までは。悉く神ふ物白しけむも。然も有ばき事ふりと。然るを天皇祖神とちれ御命もちて。皇美麻命も顯明事を治看し。大国主神も。幽冥事を治看しにおゆ。分りと定めて後。物等も顯ふ形こそ見もれ。實も幽ふ屬ぬふ故ふ。顯世人ふは。言語は安成ふ安らば。神世よ物の言語へる故事を。疑ふ事とも成ぬるふりと。凡て物の幽ふ屬ことも。家ふまれ処よりまき。火災ふ有時も。それ豫よ。其辺ふ住む鳥獸ふどの。他ふ避往を思ふべし。此も其災も。人の過りて為出とるふ万れ。盗ひる奴の放とるふまれ。案も幽事ふ有故よ。彼等もよく知て避往くふふむ。此を

未ふ。其気の立現る〜故ふりれど云むも。案よ其気も立現ふ〜故ぬらむよも。其やゞて神も立ぬ安めふりて。殊よそを人も知らぬを。物等のまゞ知よ知こそ奇々れ。然れど物は幽よ属て。神よ言語ふこと疑ふ。猶言はゞ。雑犬ふどの類人の畜べく定れるは。其死骸の見もるを。然らぬ限はそれ死骸とても一ゞよ有ことれし。其も鳥も飛て何処ふ往ぬらむふども云ぱ〜きゞ。大ふ獸も多ゞるを。彼等も皆いゞふ成れらむ。熟思ふべし。希〜ふ死骸のふるは。自死ぶよも非で。物ぶち相殺ーとるゞ。人も態ふ懸れふどれり。是ふ以ゆ舊くより。世ふ鳥獸を。神も使者と為給ふぬぞ云ひ。予ゞ鳥獸万物も。幽冥よ属てふ説も。誣言れらぬことを。辨布し。然れど今世ふも時としては。人も夢ふ入めて言語ふ事ふの。其は夢よは。神の幽ふ通ふこゞ有れど。かの秦大津父ゞ助とりし狼も。欽明天皇の御夢よ誨白して。大津父よ官位を賜もし。免とる類を思ふぱし。まと夢よ幽の託を。物よ。聞ふと。古も今も甚多ゞ。未ふ物も人形と變ては。人も言語を

外し。神も物の形と變ては言語(コト)むに。其物ごけの力をれ
ふ事もいと多うゆ。狐狸あど。人形と化て能言語ふこ
る龍も。国史よも萬農池神と有て。從五位下を授らまと
ふ神ゐるふ。小蛇と化しうぞ。比良山の釈魔ゐ鶏と化れ
ゐよ。搔抓れて食きむ。比叡山ゐ釈魔ゐ。古屎鶏をゐ
めて。童部等よ縛り搦らきて。殺さきむと為れる類の物
語書ふ多うる。古れら怪し妃ゐ中ふ。ゆをも奇異(クレビ)ゐ事
を。熟思ふべし。
ゐふゐ。幽ふも定ゑ不ゐる事ゐふゐれまど。凡人ゐ心もて
は。其理を如何とも探(サグ)
ア索むべき由ゐし。

於是(コヽニ)八上比賣(ヤガミヒメ)答(コタヘ)八十神(ヤソガミ)云(ニケラク)吾
不聞(キカイマシタチノ)汝等(ナトアハ)出言(オホナム)將嫁(ヲ)大名牟遲(ダイミヤウチノ)
神云(カミニイフカレコヽニヤ)故爾八十神(ソガミ)怒而(イカリテ)將殺(ムトコロサオホ)大
名牟遲神(ナムヂノカミヲトモニハカリテ)共議而(イタリハヽキノクニノ)至伯耆国(ハクキノクニノ)
手間山本(テマノヤマモトニテ)而云(イヒケルハ)者(コノヤマニアカ平アル)此山赤猪在
也(ナリカレワレドモオヒクダリナバ)故和禮共追下則(イマシレマチトレモレ)汝待取(ナ)若

不待取則必將殺汝云而似猪
大石以火燒而轉落追下矣爾
取時於其石所燒著而死矣爾
其御祖命哭患而參上天而請
神產巢日命出時乃遣蚶貝比
賣與蛤貝比賣而令作活出爾
蚶貝比賣伎佐宜集而蚶貝比
賣持水而塗母乳汁則成麗壯
夫而出遊行矣

答八十神云師云此前ふ聘せし事れ有ばきを其なば畧て多ぐふ其答を云る処ア。然ま足ぬあ〜ちに。ど何とゝや言。○不聞え。

承引じおゐ。○將嫁ハ阿波那と訓べし。那ハ牟と云ふ同じ古辭ゆ。此由上ふけて委く云ゐ。此ハ先ふ蒐を惱しとゝ助ゐると。善惡き所爲を見て。其善き心を歸とるゝは。此神ハ元よゐ萬おを犯く勝とるからふ。何故と外く靡とるゝ。如何まれ。彼蒐の事ハ。もはら此妻問の事ふかゝを云ゝふまゞ。自蒐れ靈を加ゐる事ハ。前よ云へるゞ如し。○手間山本。和名抄ふ。伯耆國會見郡天萬郷あゆ。此ふゐは。出雲風土記意宇郡段よ。道通國東堺手間剗と見え。今彼國意宇郡筑野村間瀉海中ふ手間天神と云ありと。或書よ見も。古今六帖關歌ふ。八雲立出雲國の手間關いのふるてはふ君障るらゞ待ちばし

人知見むや我せおゑ。留かゑてゞ手間と名ぢけし。堀川院百首ふ。けゐとも思ひしゝぢも八雲立て万ハ關ふも秋ハゞはらゞ。國堺ふる故ふ。伯耆とゆ出雲ともせしふゝゝし。まと郷ハ伯耆。關ハ出雲よ屬るゝいゝふまゝ別よはあらじ。○舊事紀ゐ。手向山とあるハ。写誤れるゝし。○赤猪。神功皇后紀ふも見も。今ハ石を火ふ燒て。欺ゝむゆ米よ。赤と色を云へるゝ外ゐはと記中よ。白猪と云ゆ見も。和名抄ふ。尓雅注云。猪一名。彘。和名井。兼名苑云。一名。豕。方言注云。豚。豕子也と見も。○第九十七段よ白猪も見も。○和禮共三字。連て和禮杼毛と訓べし。我とも吾とゆ書べきを。假字よ書るハ。ゆ甚古き書よ。書るゝ。ゆ依れるゝや。○追下則下るは。猪を下ゐゝふ非ゞ。猪を追て。八十神の下ふゐ。同言の此下ふあると。考合せて知

ばし。○待取て常ふはあぐ待おくるを云て取て輕ム言ふ
ふを此は取の言重し。山下ふ在て待承て捕ずよと云れ
ア。○大石て意富伊志と訓ばし。白檮原宮段の御歌ふ意
斐志とあるふ依れア。斐て冨伊の切り。伊波とて訓まじ。○轉落
追下矣ムの追下も八十神れ下ふふアア。上ふ云る言ふ應
ふ。もしこまを大名牟遅神の追下と云る時ハ待取と云
るふ逢へぐふり。はと上ふ云る追下も猪を下ふふ非
ぐと云るふと此と合せて心得べし。前後
ふて同言の意れ替るばきふら祐ぐふア。○爾取時ハ大
名牟遅神れ待取ふア。出雲風土記ふ意宇郡宍道郷郡家
正西卅七里所造天下大神命之追給猪像南山有二長一二丈
七尺高一丈周五丈七尺一長二丈五尺高八尺周四丈一尺追猪犬像長一丈高四尺周一丈九尺其

形爲石无異猪犬至今猶在故云宍道と云ふを見也今云所造
天下大神て大名牟遅神ふり。さて此宍道郷て郡家西卅
七里とあれて手間山とて遙ふ隔れ〳〵て別事ふり本文
の傳て。いまぐ大国主神をふめ給ハざる時のふと風土
記れ傳は既ふ大国主を成給ひて遊猟し給ひし時れ事
と聞えと。ちて此神のはと如此人れ云はふ爲給へるふ
を。上れ帛を貢給ひしと同意れア。○死て今云麻賀理と
めはと直ふ斯邇とも訓ばし。師て美宇勢給比伎を訓れ
亡とあれて古語ふまど。ふあ斯迩とる。此は古き祝詞ふも身
を。麻賀理とも云ふぞ正しき。○御祖命て大名牟遅
神れ御母ふまば刺国若比賣ふア。記中凡て御祖とは母
を云る例れア。山城国賀茂御祖神社ふども然り。抑父れ於夜ふるは本を
アれ事ふはふ母をしめ殊ふ云る所以て子は母れ許ふ

生長し給まで。父と母とも親睦しく。同家に在る故に。朝暮此事に触れても。御祖と云。先母を云しなり。古事記の上代は意を失ひて。祖宇を書るは。上に云る如く。於夜は父母に限らず。遠祖までに通ふ称なる故に。此字をも訓ひ。さて言の同じきはなり。古へは例れり。続紀十五に祖子父母を云るにも借て書るも。古へは例れり。

とも書ひ。明宮段に。秋山之下氷壯夫春山之霞壯夫とて。兄弟此神。伊豆志袁登賣神を聘し處に。其母の種く計おちし事なひ。此段と意をく似とり。凡てかゝ体事どめ。父は知ぬて。中〻に。母此事執ひ知なひおろ。殊に親き故おゆかし。○請神産巣日命とは。上件の状を白して。救活を給はらむ事を乞なひ。産靈は御名は意思ひ合はゞ。

今云。古事記中に。神皇産靈神は御名を記せる例。始めて御名の出る処と。少毘古那神段に。久延毘古が言ふのみ。神産巣日神を有て。其外は何処も何処も。神産巣日御祖命とのみ。そは此神は女神にて。神のめとの御母に坐せば。然るに此処に。御祖と云ざるは。大名牟遅神は御祖と混むことを思ひてなるべし。猶は由は。第一段の傳に委く注せるを見よ。○蚶貝比賣。蚶貝は伎佐賀比と訓ひし。和名抄に。唐韻云。蚶。蚌。蜃。狀如蛤。圓而厚。外有理縱横。即今。魰也。辨色立成云。和名木佐とのり。古へは本草に魁蛤とのり。今阿加〻比と云物なり。出羽国なるきちゝと云地名をも。延喜式に蚶方と書ひ。まと倭姫命世記に。阿佐加加多尓。伎佐宇阿佐留とのるも。蚶乎求に。ちて出雲風土記に。御祖神魂命御子。支佐加比賣命とのひ。一本に。支佐加比比賣命とあひ。○蛤貝比賣は。宇牟岐比賣

を訓ぜし。其故は御紀に。景行天皇東国を巡り賜し時。そ
の海の白蛤を膾に作て奉りしを見て。姓氏録に大蛤とあり。
此を宇牟岐と訓り。此事は景行天皇巻に見えたり。ちなみに和名抄には。蚌
蛤、一名含漿。和名波万久理。海蛤、和名宇無木乃加比。文蛤、
和名伊太夜加比。と分て出せれども。蛤と云は。波万具理
は類の介蟲どもの總名にて。右の三漢名は。彼国にても互に混ひて。詳に分ざれ
ば。此方にても。古人は心くに当ては。ら定ぜきにも非ず。○今云。信に此師説の如く。古
人は心くりぞ當とめれば。然るに今昔物語に。品不賤人
去妻。後返棲。語と云條に。難波の濱辺を見行けるに。蛤の
小やうなる。海松は房やうに生出とりれるを見付て。
云くと。石に海松は美流貝にこそ生れ。波麻具理に生る
物なれ。非ず。蛤字は美流貝に當
て書るなり。此をも思ひ合べし。右は三の和名は中に。

宇牟岐ぞ蛤の古名なれば。餘の二は。其中にて。後に分とる
古く。餘は二は名なり。故名はさるも。宇牟岐は
や〜後なり。宇鏡にも。蚶螺蛸など字を。何れも宇牟
岐と記して。餘は二名は凡て見えず。されど本は。凡て宇
後は其中にて。小きを濱栗とぞ。大なるを本は。牟岐と云しを。や〜
呼び。文あるを板屋貝とぞ。板屋貝とは其文の。
板屋根葺目に似たる故の名なるべし。偖は。板屋貝とは。
ひは宇牟岐てふ名は亡て。大小凡て波万具理と云なり
り。○今云。此の蛤貝を延佳本は。於布加比を訓るに。
きて。なほ論れし説あれど。此は專とおき事なれど。今は
畧記て。記傳に就て見べし。出雲風土記に。神魂命御子。宇武賀比賣命
を見き。一本に。宇牟賀比比賣命とあり。○遣は。於許世氐と訓むぜし。此
は彼を。此に遣はれぞ。○令作活は。都久理伊加
佐志米賜と訓ぜし。令活は。大名牟遅神に係り。
令活は。二比賣に加〜。上の令は。神

産巣日命ノ作レル繕治ノ具。国作ノ作レル如シ。○伎佐宜は。研シ削ル具。和名抄ニ。碾磑之流トアリ。志良を切て佐を云ひ。下れ志を省かり。はと氣豆理を宜とれみ云例に。弓削を由宜と云ふ是れ也。躰源抄ニ。笙五管名物れ中ニ。幾佐気繪と云ふり。蚶界繪とも書とり。今世れ言ふ。物を許曾宜流を云に。此伎佐宜れ訛を法よて意に同じ。○集に。加茂大人の考ヘ。焦字の誤ぞりとて法ぞよ紀。許賀志と訓べし。蚶貝れ殼を研磨り粉て燒焦して

ふ也。今云。此集字に。焦の誤と云こと。寡に然る説ふ法ゲ。諸本とふ集とあるよ就て按ふ。今昔物語。平定文。假借本院侍從語を云條ニ。艶ズ思ヒ集レテ過ヌ云く。と。て法五六本みふ集字ふり。然れど共よ誤よは非ず。と見も。今傳にらぬ字書ニ。集集相通ふ由有て。古人の用とるふ

に非じ。ちて今如此して功を成せるふ因て。此貝れ名を伎佐とは負る也。今云。ふを記傳を見べし。○持水而眞福寺本。延佳本。まと舊事紀ふと。ふ。侍承とあれど。さて伎佐宜集。而を云へ法と相應は歟。凡て蛤貝の中ふに。水を含み持と法物ふり。蚌蛤一名含漿。と漢籍よ。ふるをも思ふべし。○塗母乳汁則に。於母能知志流登奴禮婆と訓法し。母に乳母を云ふ也。凡て於母と云に。親母ふ法ふまを乳母ふまを。兒ふ乳を飲ゑむる人の稱ふまを。親母とせむも違は歟。親母を於毛と云ことふ就て。れ称ふり。然るを多く。波くの古言とれみ心得て。乳養の事ふ法ふ於うらぬ処れ母字をも。ふべて於モと訓に非ず。ことをれり。ちれど玉垣宮段ふ。取御母とふるも乳母ふ也。

也れ於母の事は彼處ふ委しく云ばし。垂仁天皇卷見るべし。乳汁

二字を。多く知とれみも訓べきふ似とれど。知をもをは。
出る處を名ふて。出る汁を名ふとを非ず。然るを其汁をも
知と云は。や〳〵後ふ畧々ふ成ふ。ぢて此の方は。ふ世間
ふ常ふ萬の傷ふ母を乳汁を塗て。愈々方ゐる故り。此法上代
ふもをら為ふ事ふるべし。今蛤貝を水ふ。其如くふ塗と云意ふ。故
知志流登と訓べしをは云ふ。空穂物語俊蔭巻ふ。紅葉
を雫を乳房を嘗ふ〳〵在ふ成ふ云く。とゐる登ふ同じ。方葉
十四ふ。信濃ふるちをまの河をさぐましも。君し
ふみてぐ多麻等比呂波牟。この等も同ふ格ふ。そは彼
蚶貝の焦粉を。蛤の水以てを紀て。母乳汁を塗如くふ塗
ふ。ぢて宇牟岐てふ名を。母貝の約とるふて。今かく母乳汁を如く塗て。功をふせしふ因て貝ふ

ゆ。然るを宇牟岐の貝と云を。後を重言ふり。ぢて右を二比賣を。直ふ介蟲を謂
ふを。ぢらば。尋常の神ふ天。蚶貝比賣蚶貝を伎佐宜集而。
蛤貝比賣。蛤貝を水を持ふと云ふをふ成。神名ふ由ふ
ぢて。其用ひとふ貝名をば。共ふ畧ける外ぢ。是るも一の文ふ成べし。
ぢふ然二の貝を用ひて。功をふせしふ因て。其貝を名成
以て。其神名ふも稱しふるぢし。今云此二比賣のこと。二
を考ふ。右の二比賣を。即蚶貝と蛤貝とを云ふぢ。其一
比賣と云を。雉を鳴女を云。魚名ふも赤女口女鯛女ふ
ど。皆女を定ふ云る。凡て例とも為ばれど。此を多
女を云ばして比賣と云る。今の功を美称て。神とせる
名ふぢを云れき。然れば己は上を考ふ心引るれむ。其方
を取ふ。然るを。第百四段。第百五段ふ記せふ如く。二比賣
共ふ正しき事跡の案ゐり。殊り蚶貝比賣を。佐田大神と
云ふ。やごとを。れき神をさ冥ふ生坐れむ。直の介蟲をを思

たまざれば。○麗壯夫麗をたこ此りては火傷の肌膚の。本れ如くふ愈とる意を帯て云るふはばし。壯夫とは此字の如れ。少壯ふはを云稱ふはふと。上第六段ふ云はが如し。○遊行た阿流伎と訓べし。今云下の矣た語り辞ふり。万葉三ふ公之阿流久爾五ふ阿蘇比阿留伎斯。十八ふ安流氣騰ふど所ゆ。書紀よ。歩行の訓。まと中古の物語文ふどよも。阿理久と云ぞ雅言の如く聞も。れれぞ。れみ見えふれば。阿理久と云ぞ雅言の如く聞も。れれぞ。其れか所ゆて後ふ已れり。

於是八十神見出。且欺而率入山而。切伏大樹。茹矢打立其木。令入其中而。即打離其冰目矢而拷殺矣。爾亦其御祖命哭乍求則。見得。即拆其木而。取出活而。告其子言。汝有此間則。遂爲

八十神所滅焉云而乃於木国
出大屋毘古神出御許速遣出。
爾八十神覓追臻而矢刺出時。
自木俣漏逃而去矣。

率入山。おの山ゝ何所の山とも傳ゝらざるあり。前の同。
山ゝ非じ。○茹矢ハ茹字諸本ゝ茹と作るを記傳ゝ眞
福寺本ゝ茹と作るを取て茹字ゝ食也と注せれど波米
氏と訓ぜしを有り。此ゝ依て前ゝは茹矢而を文を成し
ゝぞ。後ゝ越後信濃陸奥ゝどの国人ゝ言を聞くゝ。彼国
ゝ杜人の言ゝ大ゝる木を掾割るゝ指込む久佐備と云
物ゝ云を波米矢と云ゝ是疑ゝく古言ゝ遺れるゝ
故今ゝ本ゝゝゝゝ茹矢と書て波米夜と訓ゝ波米は。
師云令食の切まゝ言ゝ伊勢物語の歌ゝきゝ
波米ゝゝとゝる波米ゝども是ゝ凡て物を入ゝを。
波年流ぞ云も皆本ゝ令食意ゝ。さて此ゝ食と書ばし
少し物遠きゝ ちにきど此ゝ物を食しむる歟云ふ
とゝ事の異ゝる故ゝ字を換て書さるゝも有べし。

て矢ゝ。お〳〵は尋常ゝ矢ふゝ非ず。木ふ掾入きて割目を
ゝく当具を云。次ふ氷目矢と云る即其物ふり。或人云。今世ふ木を割ふ難きゝ。柯の無き斧を其木口ふ挾みて掾を矢と云へ。是れり。茹とは。木ふ掾入る〳〵を云ふり。恩
ふふ。氷字ゝ。羽字の右ゝ竪の畫ゝ滅て誤きふふて。羽目
矢ふてもあらむ。若然らば。木ふ掾茹る由ゝ名ふり。と
有。然れど茹矢打立其木と訓ぎく思ふふふ。はと信友
考ふ。茹矢は。能米夜と訓べし。能米ゝ令呑の義ふて。能麻世の約。能米ふり。木を割くふ。其木牙掾こみ令呑矢ゝ由れり。能米
てふ語ゝ。和名抄ふ。綯周易註云。衣綯字亦作袖和名夫祢乃能米。所以
塞舟漏也と云。一本ふ綯をみふ綯と袖をき綯と云り。色葉字類抄ふは。

綯亦作袖塞船漏絮也。ノ三ノ丶はと袖ノマウ袖ッ舟名義抄ふ
綯亦袖フネノ丶メノ三也はと運歩集ふ。筋ノマ舟筋玉篇ふ
筋刮取竹皮爲筋。まと竹筋以塞舟ノメともふ。さて綯
字今字書どもふ見當ら祐ど。絮緼也塞也。或作袖と注ふ
。古は絮を綯と毛作るふふ。綯筋の二字ゝ。今字書
共ふ。所謂塞船漏を云ふ義ゝ見當ら祐ど。字類抄ふ。敗船筋仁謂音陶景
注云。此大編刮竹筋以程漏処者。フ子ノアカ古は其義ふ
と訓り。おゝノメを舟のアカと云ふ。
も用と。し故ふ。上ふ引ふる字書共ふ。さふ釋の有ふ。
然れど綯筋筋ゝ字。何も能米。轉じては。ノ三ともノマ
とも云ふ用と。ふふ。さて舟ふノメと云ゝ。舟漏水の漏

容ざはやうふ。板の透間を塞ぐとて。檜皮あどさし食む
る。おれをノメノマやをめ。を云はあ卍。字は竹筋あぎを。さ
て。釈る　し食むる方の義ふ
あり。今水器は水を洩さむ料ふ鑿とは穴を塞ぐ枠を
ノミと云も。其物こそ異あれ。ノミてふ語の意は同じ。其穴
をノミ穴と云。はと樽あどふ。ノミグチを云は。其ノミ穴を卍。垂
卍出は口ある由ぬ卍。ノミを云語の本は意は。何ふまれ。
かとく打こむやうは事を云。るあ卍。扱ハメを云は。令食
意。水あど牙ハムルも是あり。ノメも食呑は意ぬきだ。大かと同意あ
れどめ細ふ云はゞ。ノメは令呑の義ふて。窄く深く。ア
堅卍義を含み。ハメは令食にて。廣く浅く。まあ緩き義を

含免卍。試べし。匠具の鑿もノメふて。木牙打徹意もて稱
けとはゞし。令呑は意あきだ。用語の躰語とぬ卍ゆる例ふて。ノメと云む方正し
卍を。舟のノメを。ノミともノマとも云る如く。本語むノメあらむを。轉りてノミをめ云るあり。ちを
ば記ふ。茹矢とはる茹を食也。又飯牛馬也。とはは字注の
有ふ依て。ハメを訓れと為た。い為く物遠し。茹は筋は誤
り。竹相似と卍。又上ふ引為は四種の字は糸竹衣ふ从ひ。如加
は字の相離れば。又餘ふも。竹冠サ冠。通じて書る字もは
は例あどふ。思ひ準ふるに。記ふ。茹まと茄と作はめ。共ふ
同義は字ふて。古ノメと云ふ用とはふも有ゞし。然れど
此文。茹矢打立其木と訓ゞし。今も木を割くふ。堅き木ふ

て本末ど太く作りと云ふ。矢と云物を作り。其を掾立て漸
ふ割ものあり。其を矢なくは出とも云ゆ。軍と云も。めと射て。敵の軀ふ
為食意れ詞よて。戰の場ふて。矢をいくは出と云。まと的
をいくはと云も。同義れ詞と通也。シクヒアヒあども。ク
ヒアヒふて。おれ互よ食れ意あり。此外ふもクヒ
てふ語よて。解るげあるゲ多し。おれ因よ云ふ。然して
木を割く具を。古ノメ矢と云るふ法なし。其を大木よ掾
立てあり。古き軍記ふ。矢を深く射込さるおと城。羽ぶく
らを飲て立あり。とやうよ云法も。羽の半まで。令呑て。射
立あ法を云法文ふ法なも。思ひ合出ばし。を云ふ見む
人擇びて採ばし。○令入其中とた。師云。大名年遲命を。其
木れ割のけある間よ入ちむる外。ちて其木の割目は。
あゞいさゝりれ廣

さあるばきふ。其中ふ人を入れむ事れ。いかゞと
云疑あ法べし。此事れ次ある鼠の段ふ論ふべし。○打離
氷目矢れ。比米乃矢乎宇知離知氐と訓ばし。師云氷目と
は。字は借字ふて。木外どれ割目をいふ。樋目れ意ふらむ
の。俗言よ。比米和流く。比和流く。比毘和流く。比毘
も。比米の訛あるべし。和名抄ふ。嫁比美。俗よれ比毘と
云。是も比米外法ばし。はゝ万葉十六ゆ。比米加夫良。八多
婆左弥。宍待跡云く。と有れ。狩よ用さりと見もれバ。此の
氷目矢とれ。固よ別あきども。比米を云名の意れ。同じ
らるべし。八目鳴鏑と云は。鏑ふ孔のいく於も有を云ふ。
む。比米鏑も。其孔を長く。樋よ彫さるを云ふ。ばゝ
きバあり。今云。間字ヒヤと云も。本れ同意外法べし。扨氷
目矢をうち離とた。其ヒメふ打立と法茄矢を打離ちて
を云る外。○拷殺矣とは。かの木れ割目ふ挾置さる矢
を。打離ち去法と。其割目忽ふ迫り合もあよ。其中ふ

挾まれて死給ひしあり。○見得ハ。師云美延氐と訓べし。得た見ことを得てと云意よた非爻求絶て得ゑは意あり。今云本ふた得見をあるを此師説よりて目易く見得と書るあり。○拆其木は此切伏と法大樹の割目ふ挾まを死て坐を見ゑけと法故ふ其木を拆割て屍を取出し給ふあり。○取出た割目を出出云外り。○活師云此度も前の如く令活方術ありりむを。其た傳ざりしふ法ゑを志。○其子とは大名牟遲神を申に。○此間た許くと訓べし。○爲八十神師云爲字を多米尓を訓ばし。かくの如き爲字を多米尓と訓むた漢籍訓れ誤あり。○木国之大屋毘古神た五十猛神よて此神れ木国ふ坐法由た既よ注ゑり。

第六十七段の傳見べし。理をもて思ふよ。此神の本體た須佐之男神ふ屬て必豫美よ往坐して有べれれバ今木国よ坐に。世よ幸ひ給ふ御靈を往昔坐志處ふ留免給へ法神ふぞ坐出ばき然まど其御功德た同じあと外り。○速遣之た。伊曾賀志夜理賜伎を訓べし。師云速字此処たスミヤカニとも。トクとも訓てたりき外り。訓てたりきれり。許ふしも令遁遣ゑ乃ふ所以た。此神ハ須佐之男大神れ荒魂神よて其御子とは申せども。実た天照大御神と須佐之男神れ荒御魂八十柱津日神ふ坐まし。ふ其本を申せむ。伊邪那岐大神の世れ禍事枉物を憎惡ひ給ふ御

靈ふ因て生坐る神ふ坐もあふ其神性の伊猛く剛く御坐におと上ふ見と依ゞ如ふきだ其御靈を幸ひし処猛き心を振起させて八十神ふ勝せ奉らむとれ御心ふや。然るは大名牟遅神おの程までた多く和御魂のみ勝れて餘卍ふ云がひふく八十神れ爲るゞはふ〳〵辛苦処らきて少ゝも荒御魂れ進ふく怯きを御祖命れ口惜く思食せる故犯るぱし然有ぢおそ此れち此神の御態を熟〻見奉依ふ荒魂和魂をく備ハ卍て見え給ふふき。抑荒魂和魂た神ふも人ふも備ハらでた得有まじく此た始ふも云る如く譬へむ車ふ両輪ふくてた得有まじきゞ如きこと神道を学ばむ人た熟思ふぱきふり。○覓追た跡を尋ね て追行れ卍。

○臻た師云追及ふ卍。俗ふ追著といふ意ふり。此た大屋毘古神れ御許までは至らで中途ふて追及しふるぱし。○矢刺之時。矢刺と云るふと白檮原宮段ふ弟由氣矢刺而追入と有を始処多く見也。明宮段朝倉宮段ふど見るぱし。古言ふる依し。此た射むをて矢を弓ふ懸るを云。後世の軍記どもふさしおゞふを云是れり。○自木俣漏逃而去矣。師云ふた暫大樹れ下ふ隱居て其木の俣ふて脱出て竊ふ遁去給ふふ卍。木俣た字鏡ふ。椏江南謂樹岐爲杈椏木乃万太と訓り。和名抄ふは杈椏を漏れ事は下ふいふ。第九十段の末多布里とあり。傳見るべし。去字は佐理賜伎を訓ぢし。此た伊迩と訓てた宜らぱ。此差た古れ言ふよく練て知るぱし。

爾大屋毘古神議曰。可レ參二向須佐之男命所一坐之根堅洲国。必其大神將レ議焉詔矣。故隨二御命一而參二到須佐之男命御所一則。其御女須勢理毘賣命出見而。爲二目合一相婚坐而。還入告二其御父一。甚麗神參來坐焉。白矣。爾其大神出見而。此者葦原醜男云神也。告而。卽喚入而。令寢二其蛇室一矣。於是其妻須勢理毘賣

命(ミコトヲ)以(ヘミノヒ)蛇比禮(サヅケソノヒコヂニテノリタマハクソノ)授(サヅケ)其夫(ヒコヂニ)而告云(ノリタマハク)。其蛇將(ヘミセムト)咋(クハムトバ)則(ヲ)。以(ニ)此(コノヒ)比禮(レ)三(ミタビ)舉(フリ)而(テ)可(タマヘト)打撥(ウチハラヒノリタマフカレ)告(ゴトヲレヘノレ)出(タマヒレカバヘミ)。故如(ゴトレ)教(オシヘカラ)爲出則(レバ)。蛇自(ヘミヨリシ)靜出(ユヱニヤスクイネテ)故(ユヱニ)。平寢(イデタマヒロキ)而出(テタクルヒノヨ)矣。亦來日夜(ハイレタマヒムカデトトノハチムロヤニレヲ)者。入(ニ)吳公與(レ)蜂室屋(ヤニレヲ)然。且授(ニ)吳(タマサヅケムカ)公蜂(デハチノヒ)比禮(レヲ)而。如(ゴトサキノヲレヘタマヒレユヱニヤスク)先教出故。平(テイデタマヒロキ)而出矣。

爾大屋毘古神議曰。おの八字は。篤胤ぐ謹て補へる処也。其由は。徵を見て知べし。けて此御言は前ふ。大名牟遲神の。八十神ふ苦免られ賜ふ由を。白し給へる事は有べきふ。其事処なは。前後の文よ讓りて省けはおゐべし。○須佐之男命所坐之根之堅洲国。おは豫母都国を稱ふおと上よ云ひ。第三十段の傳見るべし。けて此大神は。豫母都国ふ就坐せはこと。既ふ

上ふ出於。今は既く。彼国の大神とおゆて坐くせる外ア。
第七十九段の傳見べし。○可參向師云參向二字。記中ふ往くあは。何
ま目め參向奉とおろふ云ア。然れども此て。其意ふ非ぎ。と
ど參ふア。參赴二字も。多く參迎奉る処ふ用ひ。まさ多く參ふ用とは処もあり。ちて麻韋禮
ぞも訓ぎ。ま目ど。此て外て麻韋傳氏余と訓ぎし。そて茶師寺佛
足石御碑ふ。此御跡を尋弘求免て。與伎人の在安国ふは。
我も麻胃氏年とあり。今此も。此世を離とる国ふ往を云
るゞ似されぐおア。○將議焉て。多婆訶理賜比那牟と訓べし。あぐうは。唯ハウ
は。唯ハウる外り。此は八十神の難を免れて。功德を立給ふぎき
事を。宜さはふ度ア賜むと云ふア。塩椎神の。欠遠理命ふ。
其海神れ女見て。相議
む者ぞ。と教奉ア。
と。全同じ意外り。抑豫見都国て。伊邪那岐大神の往

昔御行坐して。其醜ぬき穢ぬ有狀を御覽して。逃返アは
し。彼国此国の往來を留むと。投給へは御杖。引塞ませる
千引石ふ。三柱れ塞神さち生坐て。其堺をし守り給ア。
現国をゆは。都て往來ふるはじき謂ふる。前ふ須佐之
男命れ往坐るて。元をゆ御母ふ屬て。彼国れ大神と爲給
ふぎき理の有れバ。此て今云ふ限アふ非ぬを。今大名牟
遲神れ往坐ゆ事は。須佐之男命ふ屬て。彼国ふ坐ゆ八十
枉津日神れ。現世を幸へ給ふと。留給ア。は御靈神の御議
ふて。大名牟遲神の身ふ負る災難をぞ。悉く彼国ふ拂ひ
捨し。ぬ須佐之男大神れ御稜威を承賜らせ給はむとれ

御議とぞ所思奉らはく。然るに此神亦名を瀨織津姫神
をも申て。彼伊邪那岐大神の禍事汚穢を惡ひ給ふ御魂
に疑天生坐る謂より依て。万に禍事枉物罪穢を豫母都國
より祓ひ遣ひ給ふ功德を思ひ合せて知はく。外ひ。此趣委くは第
九七段第五十九段の傳より註せるを見べし。偖おそ其議ふ賴て。八十神の難を
免れ。大ふ依利を得て。遂ふ功績を立給ふ。凶難至極て。
今は吉ふ趣むとにそる。凶を吉とに交際より。豫母都國より遣
給ふ事の。をく枉津日神の德ふ應へるを熟く思ふはし。
○參到則に。師云麻章多理志加婆と訓はし。到の伊を省
も佛足石御哥より。麻章多利氏。麻佐米尓弥祁年。
とのるふ依まり。參到て正目より見れむれり。○其御女

須勢理毘賣命。御名義に師說ふ。下ふる火須勢理命と同
く。進む意ふ。彼命の名義を。進む意とにる說に。
第百四十八段の傳を見て知べし。其に今
此比賣神の方をり進みて。夫ふ婚ふ故に御名ふる
はし。此次より引る。此と同類の木花之佐久夜比賣。まさ海
神に女ふどに。父に嫁を待給へるより。此比賣に
もにらば。心を相婚
せるも。進免ふ外ひ。を有ひ。偖おに比賣命に。天照大御神
を。高天原ふて御誓坐る時ふ生坐る。三女神に。一柱と坐
まに神ふるおと。上より委く注ひ。第六十四段の傳見る
を。速佐須良比賣。神を。一神ふる由
言れとるに。甚く違へる說れり。師說より。此比賣神
に須佐之男命の物ふめしのど。大御神の吹生坐る神ふ
ふより。大御神そに物實を尋給ひて。須佐之男命ふ屬給ふ

ほゞ。共ふ豫美国ふ入坐て。今かく大名牟遲神ふ相婚はして。其嫡妻とおゞ給ひ。後をゞ補ひて。功し坂神と爲給ゞ事を。幽き契なる事ぞ。○爲目合を。師云麻具波比志氐と訓ぜし。具波比を。卽物の合こゝ。ゞる由。上ふ委曲ふ云ほゞ如。ゞれど。然訓て。目を見交て事ゞゞ。麻具波比のおと。第六段の傳ふ委く注せるを見よ。ちて男女故ふ目を交ゑは。互ふ思ひなふ態ぞ。卽交通事ふも轉し云ゞゞ。然れど此は。次ふ相婚となるぞ。其事ぞ。目合は。ゞ本の意ゞ。海神宮段ふ。豐玉毘賣命。思奇出見乃見感目合白其父曰云〻。卽令婚其女豐玉毘賣となるも。令婚ゞ交通ゞば。上ゞ目合を。交ふ目見交こゝゞゞ著ぞ。此も準ゞて知ぜし。書紀ふを多く。舉目視之。まゝ仰見ゞど有ゞ。此記の目合も。多く心ゞくて。ふゞを見合せる事と思ふ人も有むゝ。ちふを非ゞ。互ふ心有思合て見交ゞ。見感となるふてめ知べく。まゝ次ふ引く迩〻藝命の御言をも思ふべし。はゝ邇〻藝命の詔ふ。吾欲目合汝と。木花之佐久夜毘賣ふ詔ゞほを。交通こゝを轉言方ゞ。かれ美斗能麻具波比となるふ同じ。○相婚を。ゞは美阿比を訓べし。美を御ゞ。○葦原醜男。師說て。延佳本ゞどふは。命字あゞども。此は舊印本ふ無ぞよ。坂下ふ是奴を詔ゞほ御言。まゝ此時の凡てゞ接待ゞを思ふふ。命を詔ふはじゝれゞ。ち多此御名を。此をゞ後ふ賀給ゞる御名ゞ。此ふを今詔ふを。例の後を

もて、前牙も同じて語り傳ふとる語あるべし。を有ア。火遠理命の海神宮ゐ往坐る段ゐ。爾海神自出見而此人者天津日高之御子虛空津日高也云而即奉率入内云〻。と有ゐ相類とア。○其蛇室屋師云加茂翁た其字ハ無てなるばしと言れしうども。此た其處之と處を云る意ゐて。須佐之男命の坐宮れ邊ゐる事を斷れる辭ゐまだ。必有ゐぞを記。蛇た此は吳公蜂ゐぞ〻類牙て云ゐを思ふよ。小蛇ゐる度ゐまだ。弊美と訓ばし。遠呂智とた最大ゐゐを云べれバ此た然訓まじきう將昨とた大蛇ゐらぎとも云ばし。和名抄ゐ。蛇和名倍美。一云久知奈波日本紀私記云乎呂知。蚖蛇加良須倍美。蚺蛇仁之木倍美とゐアて。弊美てふ名ぞ主と聞ゐる。但し弊美と云た反鼻の字音とり出とるうの疑あり。ぬ。ばれぞも同和名抄れ蝮の條ゐ俗或呼蛇為反鼻其音片尾と云るは右ゐ引る和名倍美とた似とれども別ゐりぞ聞も反鼻たもとをゆれ正名ゐ非ぎそまめ上代此御国ゐ無アし物は漢一名ゐどをも取て名くる例こまゐまゐ有まども蛇ゐどた神代より有る物ゐまた名も無かるべきふ非ぎもし乎呂知を古名とせむゐも既ゐさゐ名ゐゐうゐた更ゐ漢一名ゐ借求むべき由ゐし其上弊美と云名は廣く云ゐはしとるさはゐ聞もるをや然まだ此た反鼻の音と自然似ゐゐのみゐりけア。万葉ゐも。倍美と云辭ゐ。蛇を借て書る處あア。○今云於迦美倍美美豆知ゐぞの美これ同じゐをて龍蛇れ類の總名ゐり十二支れ巳を美と訓るゐて知ばし。さて倍美た辺美於迦美た奥美う奥所美りて奥と辺とを對へとる名ゐゐ由は既ゐ委く第十六段の傳ゐ云ゐア。しちて小蛇とれるふ付て思ゐば。蝮蛇ゐらむう。其故た類へゐ云ゐ吳公め蜂も。共ゐ螫物ゐまだ。是も然るばゐまばゐ

ア。尋常の蛇をいちはみ害をあらぬ物あれど。此も蝮蛇よりてをく叶ふべきぞ。咋とを螫を云ふ。とをてめ妨あるぞ。

いちて其も蛇の一種あまぼ。古は共ふ多く蛇とも云ふ。

和名抄よは。蝮を和名波美とあア。今云眞虫あア。眞と云を害をあ毒あまの甚しき故あり。狼を眞神と云ぐ如し。但し尋常の蛇を見ても有ぬべし。いちてかく蛇室次よ吳公蜂室あぐ〜て有るを。如何あるる故ふ。若は根囲あまぐ。人れ害を外毒。かく。此物れ類凡て多かるよや。下文ふ見其頭者。吳公多在とあるる外どを以て。其處の狀を思ふ。其ぐ中ふも。蛇室を云を。殊よ蛇れ多かふ室を云ふるべし。

○令寢ハ。師云泥志米賜伎と訓べし。今人れ詞ふひよて見まぐ。泥佐志米と訓べきぐ如くあまぐ。其を雅とらぐ。万葉二十よ。山人乃和礼尓依志米之とあり。令得しあり。得と寢を全同格の詞ふひあア。得む寢む。得る寢ふ外ぐ〜。第三第四の音よて活用ゆ。まと万葉十四東哥よ。伊射祢志米刀羅と云こと有を。令寢あらむ。

○其妻師云。既ふ一度相婚坐ふる故よを。

を妻と云ア。次よ其夫ともあア。○蛇比禮師云饒速日命。天を降給ふ時ふ。天神の授賜へふ瑞寶十種の中よも。蛇比禮一。蜂比禮一。品物比禮一と有て。其を用ふ道を教給ふ御言ふ。布瑠部由良由良止布瑠部と有ア。あれ事委く。神武天皇巻よ見ゆ。此を蛇の身れ鰭と云ふを非ぐ。蛇を撥ふ比禮あア。譬へば。蛇之麁正あぐ云。劔名あどめ。蛇ゲ劔よをふら。で。蛇を斬とる劔外るゲ如し。凡て物の名ふ。此例多し。右の十種中よ。品物比礼一と有よても。其身れ鰭ふ非ぬことを知べし。種く物身の鰭あらぐ。一よを非じをや。天之日示れ持渡來し寶物れ中よ。振浪比禮切浪比禮あ

どゐる比禮ふ同じ。偖それ比禮てふ物た。如何ある物ぞを云ふよ。はゐ比禮をた。振手の約ゐとは名ふて。何よまれ打振物を云。理氏を。礼と切れば。布礼あきと。布理は。比と切まば。おれおゐら比禮を云る〳〵。ゐ。ちまで魚れ鰭も。水中を行とて振物服の領巾も。本た振む料ふて。皆本は。一ッ意ふ名とる物ぞ。故よ上代よ。領巾た。必振ことを云ゐ。然れで蛇比禮をた。蛇を撥ふとて。振物れ名ふゐ。然る右の由〻良〻止布瑠部とゐる詞よ就て。王ふめれど云説た叶れば。由良由良た。振さまを云。詞。布瑠閉た。即振きを延とることとばふめり。○其夫は。師云曾能比古遲と訓ばし。夫を比古遲と云るふと。下よ見も。彼處よ云ばし。第九十九段の傳見べし。はゐと遠をも訓ばし。即これ比賣神の御歌ふ。那遠伎氐遠波那志とゐの。汝を除て夫た無ふり。和名抄ふ。夫和名乎宇止宇止た人ふり。俗よ乎都登といふは。此訛ふめり。一云乎止古。まと後夫和名宇波乎。前夫和名之太乎と見も。是らみふ袁を本をふとは名ふゐ。○三舉た。師云美多毘布理氐と訓べし。布理を布伎と訓む。も同じ。舉た。必布理と訓ばき由は。右ふ云る〻如し。白檮原宮段の始ふ。爲釣乍。打羽舉來人とゐは舉字も。必然訓べき例を以て。思ひ定むばし。れ布彼處よ云を。も合せ考へてを。○如教爲之則師云此上ふ。果して蛇の咋むとせし事有べきを。其た上れ語よ讓ゐて。省ける文ふゐ。此例常多し。餘も準へて知べし。○自靜とは。師云起立て咋むとせし蛇の。退き靜ゐて何でふ害をも爲ざゐ

し外ア。○平寢ム。師云夜須久泥氐と訓ゟし。平ム常ム多比良と訓み。夜須久は安と書ども。此二言ム常ふ連言て同意あり。此ム必夜須久と訓べき語あア。○出矣ハ翌朝蛇室ゟア出給ふア。○來日は。師云久流比と訓べし。書紀ふ。明日明且明年外ゼ石の訓を見るふ。明字ある歟。阿久流と訓まで。久流と訓るム。是古言外ゟべし。但し助辞の都ム心得爻。此助辞を置べき言ふは非ゼ。當時此ばゥアれ事ム。誰もゟく辨冥とゟるゟきを。いゥある事ふの。久流比は翌日を云。○吳公は。師云蜈蚣外ア。但し延佳本ふ。蜈蚣と作るム。ちゥしらふ改。あるものあり。諸本みな吳公とあア。字鏡蛆字の下ふも。吳公ゼ作ア。如此偏を省外て書ム。此方ふて。古ム一書法あア。例をいはゞ。健ゟ建と書き。建字ふ。多気と訓ゟき義ムあし。假字ふ。伎を支と作外。支字ふ キ音ムあし。神名式。まと伊勢儀式帳あどふ。只字をキの假字ふ書るも。枳字外ア。弦ゟ玄ゼ作き。石村ム村を寸ゼ作き。此事池辺宮段ふ委く云べし。醜ゟ鬼ゼかア。和名抄上野國ム郷名ふ。委文之土利。とあゟも。倭字ム偏を省るふアはと後世ふ。條を条とかくめ此例あア。此らの字ども。古來物知人とちの。心得ゥ祐とる事ふるを。已近ごろ考得て。右ム例をいて見まだ。皆いと明ゥし。ちて和名抄ふ。蜈蚣。和名無加天とあゟア。○蜂。和名抄ふ。波知とあゟア。○吳公蜂之比禮。ふム吳公を撥ふと。蜂を撥ふゼ二の比禮ゥ。はと此二虫を撥ふ比禮ふて一ッゥ。何ふても有ふむ。今云十種瑞宝の中ふ。品物比礼一ッとも有まだ。此も決めて二虫を撥ふ比礼ふて。一ッふるゟし。ちて世人の害を外ゞ物ム。種く多かる中ふ。此三虫をゟめ云へる

由は。上代よ。民の家居あどばらぐくに有て。野山ふ交ひ住しあどた。此等ひ物の害ぞ多かひけむ。然れどおそ大祓詞ふも昆虫ひ災を舉げ。十種寶の中よも。此等を撥ふ比禮ひ有あひ。欽明天皇紀よ。席際現蜂蛇怪といふ事ふ有り。○平而出矣此は寢をば。上ふ倣ひ

せて畧ゝる文形ひ。

於是其大神。以鳴鏑射入大野出中而。令採其矢矣。故入其野時。卽以火燒廻其野焉。爾不知所出出間。鼠來云。出。內者富ニ恵ニ。外者須ニ夫ニ。如此言故。蹈其處則。落入隱出間。火者燒過焉。爾其鼠咋持其鳴鏑出來

而奉出其矢羽者其鼠子等皆喫矢

鳴鏑師云書紀の訓ふ那流訶夫良とあまども字鏡ふ鏑奈利加夫良とあるよ依て訓べし名義は鳴神夫理矢ぁ卍神の微を畧き理夜は良と切ふ○今云此師説もさる言ぁゞら此はカブラは加ブロと同言ふて則神と同義ぁり然まバ鳴神矢と云意ぁるばし さてカブロとカミと同言ぁる由は第一段よ注るを見るべし天智天皇紀ふ有細響如鳴鏑とあふ如く射れば空を鳴行ぐ雷よ似とまぢぁ卍 夔青根の形ふ似とふ故の名と云は非説ぁり そは返りて此鏑よ似とるのら彼根をも加夫良とハ云ぁり○今云ぁの論はいと於ぁ卍ごとぁり先後は云ばるらば鏑も夔青根もとめよ末ぁれり其本は第一段よ云ゞ如し

ちて此矢下ふも往ぐ見え兒卍古もはら用ひし物と見も書紀ふ八目鳴鏑と云も有め八目を鏑は其ふ窟のいくぁも有を云ふ

和名抄よ日本紀私記云八目鏑夜豆女加布良とあ卍雷を多ゞ神とも い牙は鳴鏑をも加夫良とれみも云べし はとは後よ鳴を畧きて加夫良せれとも云ろ加夫良をめとふて其中ふ鳴を分て鳴鏑と云よは非じ○今云カブラは本大く末細き物を云名ぁまバカブラは本よてナリカブラは末ぁるぁと上よ云と合せ辨ばし 万葉九ふ響矢とも云卍此響矢を今本の訓よは加夫良とあり袖中抄ふは那流夜はあり

ちて鏑字は只ぁばて此鏃のぁをよて分て加夫良を訓ばき義は見えば此は漢籍ふ鳴鏑と云物此方の那理加夫良ふ似と

ほ故ふ此字を當てほふまむ。鏑一字を訓るも。鳴鏑をゆ移まほふゆ。史記匈奴傳云。冒頓乃作為鳴鏑と見え。○燒て其注ふ。韋昭曰。矢鏑飛則鳴ぞなり。

迴焉て夜伎米具良志都と訓べし。○不知所出て。師云不知可出之處と云意ふれば。此所字は虛字ふ非ぐ。ちて此意て。四方をゆ燒迴ゑ故ふ。遁出べき方ふ知れゆ。抑蛇を云ひ吳公蜂と云。此事と云ひ。種々ふ苦惱を賜ふ所以て。彼八十神の如く。宗ふ害てむの御心ふは非ぐ。如此爲て。此神は勇怯まと智愚ふるを驗給てむとふるぼし。次文ふ。御心ふ愛く思して御寢ませゆを有ふて。其意著れと。まと此くさ〳〵の難苦を。おのおのら祓除て意あるをや。○鼠和名抄ふ。鼠和名禰須美と云。名義て。根住ふや。そは根。固ふ住れむふり。今現ふあるり來れる物ふらむゥと云り。然も有べくや。○内者富富良く。師云。富良て。物の中は空虛ふして。廣きを云ふ。洞ふぞ是ふゆそは廓を約ゑと言ふゆ。凡て物の。殼ばゥく。空虛れるを。俗ふ富賀良と云て此意ふり。はと朝富良と云て。富賀良富賀良と明行を云ると。全く同意ふるを以て。富良と富賀良と洞きを知るぼし。○外者須夫く。師云須夫て窄妃れ。統るも本て。廣どりとさる多くの物を。一ふ集めて窄くゆ。ふ意をりいふ言ふゆり。此須煩を須夫と通てし云例れり。ちて内とは。鼠の地中ふ構穴と言ふ穴の奥をいひ。外をは。其穴の入口を云ふゆ。外て登と訓ゑし。曾登と云て俗心得とるをり。混し外るぼし。其は背面を云こを。外面と皇紀ふ見えて。背津於母を約とるふり。背面て。山陰を云を。成務天外面の意ふ

ば中昔を卍哥あどよも外面の意
よをむれ叶れば外れ多〳〵登あり然れど如此云ふる意
は己が地中に構ふと云穴れ奥れ廓よ廣し入口れ窄狹
れれど火の燒入ぢき由ふし故暫これ穴内に隱坐て難
を免き給ふとあ卍さて富良も須夫も重祐て云るれ鼠
人谷垣守が說よ土佐國の鳴よ象れるよや○篤胤云土佐國
古登迹阿布之言或有不虞災厄亦通用此言者以出於望
外之類轉用耳或鼠之故事有吉凶二途以故假用乎此方
言蓋傳上世之諺雖細事堪愛賞焉といふり さる說あ卍
○落入隱れ淤知伊理加久理と訓べし隱を加久理と云
れ古言の格れり
師云自彼鼠穴中に落入て御身の隱給ふる卍斯て其
間に彼野火れ穴外を燒過去て其難を免給ひ却今云此
師說よ自木俣漏進と云今此よ鼠穴よ入て隱給ふと云
るを合せて思ふれ此神も少彦名命の如く身躰の甚小

く坐れるよやされど此れ あしらふ物よ見えと事無
れど定て云がさし書紀よ少彦名命のこを大己貴
神即取置掌中而翫之とあるを思ふれ同じあどに小き
神とも見え云きおれど此說は無て有まあし然る
れ木俣よれ人の入だり大あるれいくらも有卍○咋
はと鼠穴も人れ入ばかり卍れ俣ぬあどに無らむ
持万葉十六に池神の力士儛のも白鷺乃桙咋持て飛渡
らむ○奉之れ大名牟遲神よ獻るあ卍師云抑鼠れ人
れ害をれ安物の家内に在を吉とし無を凶とれるは此
故事をゆぞ出と卍れむまと近く燒燒べき家れかて祐て
知る故に鼠住ばあど云ふ兒り
○其矢羽者云く皆喫矣師說よ皆れ子等皆れり喫れ上
を共よ助けて咋ふ持來るあり鏃の方れ重れまれ大鼠
の持ち羽の方れ輕れれれ子鼠れ扶持むこと然も何る
ぢし喫とれみ云て持を省れ俣れ上よ何る故あり
ふ事をあ思ひまが ふそと言れ於まど何に見ても喫傷

ある事とをり外よりた見えば其羽を子鼠の皆喫とる事までは記し傳へばとも有ばき物なるゆ如此しも傳へとはた羽をみな喫多已しらば二度其矢を用ふること能たばゆしと云意ゆや。はと若くた大神の再射て大名牟遅神を再苦免給はむ事を思ひて羽を喫とりとの意よても有べし。

於是其御妻須勢理毘賣命者。持喪具而哭來。其父大神者。思已死訖而。出立其野則。爾持其矢而奉出時。率入家而。喚入八田間大室屋而。令取其御頭虱矣。故見其御頭則。吳公多在。爾其妻取牟久木実與赤土授其夫故。咋破其木実。含赤土而

唾出出則。其大神。以爲咋破吳公唾出而。於御心愛思而。御寢坐矣。

喪具は。師云加茂翁の。波夫理都毛能と訓れ多るゝ依るなし。書紀は祓具を此云波羅閇都毋能と訓るゝと同格なり。喪ハ毋を訓べき字なきども。此は葬せむ料は具なるなれば。毋能曾那閇と訓るも非ふは非ふ。其は心ゆゝ。其故は。まゝ凡て具字漢籍は。躰と用をは用ふ。あと字だ礼記檀弓は。喪具君子恥具

と云る。上の具は。其料ふ備る物を云て躰下の具は。それ物を備るを云て用なり。然ふは此方は。用言は曾那布と云は。古言ゆゝ。其物を指て。曾那閇と躰ふ云む。具字は依とる。後は言めきて聞もれむなり。さまゝ然訓までは。訓のあき所もあきだ。其は己こと得ず然も訓ぬべし。なを他はも此例いを多ゝ。○哭來は。師言は。那伎都く來坐志と訓べし。加茂大人の書入ふ。此は影媛が。鮪臣を葬し時の歌と。合せて見をとあ。信はをく似あと有。其は武烈天皇紀ふ。眞鳥大臣は子。鮪臣は奸ある。影媛と云るが。鮪臣の戮されとる處は行て。悲み歌ひ。其歌詞の中ふ。拖摩該爾播。伊比佐倍毋理。拖摩暮比爾。瀰逗佐倍毋理。儺岐曾褒遲喻俱謀。柯号比謎阿婆例。と見え。遂ふ其尸骸を收埋とは事あ。此玉筍ふ

飯を盛る。玉盌に水を盛りとある。即ち喪具の中なり。此も彼巻に委しく記せしが、其大凡をれみ注ずるなり。○思已死訖た須傳爾麻賀理奴登思本志氏と訓べし。抑此語も右の須勢理毘賣命者と云下ふ。先有べきを彼處ふは言で。後れて此處ふしも云るは。師云。古文の巧なり。上よも持喪具云くと云語もあまぜ。自ら死訖と思せる事ハ聞えまと此處よも然る語も無て。直ふ出立其野と云むも。語調も足ハ祓ば。彼此を以て。此處よ此語をば置て。自然ふ彼處へもひゞらせと言物ぞ。○出立其野則。師云。ふは此段の凡て此意を以多思ふはは右も如く。大名牟遲神を種く苦し免賜ふも前ふ

云如く。皆此神を驗み賜ふふはふ。今かく野火熾ふ燃れ多ぢて。既よ燒竟まで。ふれ彼神の出來坐ぬ故よ。如此ては既く所燒て。死ぬる物ぞらむと。御心も内ふもいぢれしく。心もとふく思して。其爲も終を。尋弘賜はむとてぞ。出立賜ひ於らむ。出立も、推古天皇紀の哥ふ異泥多く須と有るよ依て訓べし。○持其矢而奉之は。始ふ令採其矢。とある事字竟にふぢ。○率入家而云く。師云此も已死ぬ也を思しとるを。思ひの外ふ。彼矢を持て出來坐るふまぢ。驚賜ひて云くふど云言も。此上ふ必有ぬべき處ぞるよ。何ともちふ言も無くて。語の足もぬ心ちにるは。裏の御心を顯し賜むに。强面於くぢ

賜ふ故あり。其由は次に云べし。家は即須佐之男大神の御家なり。

○八田間大室屋師云八田間は廣く大なる謂なり。田借字は意は未思得ず。若は都の轉れるなりて。八箇間ゝ。加茂大人は八間あらむゝと云れしゝど。其意よりはなし。八は例ひ多く多を云なり。間は凡て家は柱と柱との中間を云へ。中昔までも然り。一間二間。まとは東より第一間。西より第三間など云るとぐひ。皆然り。後世は家内を區て。障子など隔とはなどを間と云も。右の意なり。轉きるなり。まとは一歩を一間と云も。右は意なり出とり。けて此大室は。次文はよは此大神は内寢と見也。○虱和名抄は說文云。蟣虱子也。和名木佐ゝ。虱齧人蟲也。和名之良美。とあり。字鏡は蟪蛸蝨などは志良彌と見え。蟣字の下は志良彌。又支加佐とあり。陰陽師上東門院の御座はとき淺ましげなる表衣指貫は平鞋はきて。鬢もの〳〵で中門を入て。階隱なの間より上りて。懷より白虫をとり出して。高欄の平桁は白虫を殺しは。を云こと城記せり。○字鏡は蛸字は白虫を一字とし。謂也る和字は。○吳公多在上の豫見国段は。

伊邪那美命の御有狀を宇士多加禮斗呂〻岐而云〻と有と合せて。彼国は狀を思ふ。師云〻は御頭は手を觸さはるも猶此神を試ふ。万ふは。○牟久木實は天武天皇紀は。椹此云武矩と見え。本草和名は。椋子木一名。椹和名牟久乃岐。とあり。和名抄は椋和名牟久と見え。字鏡は材椹枳ほどを牟久乃木とあり。まとは檟和。まとは杜松は。二字牟久とあり。○赤土は。万葉はと其餘の書

ふめ。波邇と訓べき例多かまども。此も必阿加邇と訓ばし。まと曾富迩をも訓べきあり。然るは。呉公を齧碎とる色ふ似せむ料ふ。授給牙ふ土ふまだ乳ぢ。○授其夫前ふ蛇の比禮を授けて教とる如くふ。此ふめ云くし賜牙と教給ふ言ひるばきを上ふ倣ぢせて省るもれふ。○木實ぢ。師云許能美と訓べし。上ふ依ぢ牟久とけるる故ふ木実とを免り。同字ふれぢをも少ゥ異ふ。和名抄ふ。應劭曰木実曰菓。日本紀私記云古乃美。俗云久太毛乃。をひ。

○咋破ぢ。師云久比夜夫理と訓むばし。齧碎を云ふゆ。下ふるも同じ。万葉十六ふ。机の島ぢ小螺を伊拾ひ持來て石もちてわくき破り云くとひるふ同じ。

○含は。師云布くみ美氏と訓べし。布久牟ぢ古言ふ。万葉十九ふ布敷賣流ふ。

○唾出ぢ。師云和名抄ふ。唾和名豆波岐と見え。字鏡ふ。唾口水也。液也唾也。與太利。又豆波志留。まと液小兒口所出汁也。豆波支ふど有ぢ。みふ其物を云ぢ。體言ふるを。今は用言ふ云へ。ぢて此都婆伎てふ言ふ疑ひ。中ふ含る水を津といふ牙ぢ。唾ぢ津吐の意ふるべし。然るふ津字も。都と云言をも。めと船ぢ泊ふ所ぢ名ぢまば。そをもり轉して。津液の津をも都とぢ云ゥ。若然らぢ古言ふぢ。津字をり出とる言ふり。さまど唾ぢ含くぢ吐とは。ふとのさま等しゥらふ。ぢて此ぢ椋子を咬碎きて。ぢ。都婆久を訓むふのふし。含とる赤土と和含るゥ。呉公を咬破とるふ能似とるふ依べし。○愛思而ぢ。波斯久於毛富志氏と訓ばし。師云。波斯久は字ぢ如く。愛慈しむ意ふて。倭建命の波斯祁夜斯

を歌賜ひ。万葉おどよも多く見え。愛字を書る例も。彼集ふ所の。大雀天皇の御歌ふ。阿賀波斯豆摩。吾愛妻とをみ賜ふるも是おの。おわ彼処よ委く云べし。ちて此も大名牟遅神の多かは吳公を少うも懼れ玄て。咋破賜ふと思ひて。其勇を感給ふおり。然きぞ其も御心の裏ふこ免て。色よも出し賜もぬと云おとを。慥ふ知さむ為ぬよ。於御心とは云るおの上件蛇室吳公蜂室おどふ寝志め賜しふ事故おく平くて出坐し時。まと野を燒廻しとはよ。無恙て矢を持て獻の賜ひし時も。其度毎よ御心の裏ふも。愛く思れ。のら。其心を表ふ顯もし給はぬ故ふ彼處くよも。此語を

畧も。今終の一事ふ如此云へる古文も妙へ。おる處おり。心を著て味ふぢ志。古事記も。さかしらを加ずして。古文のはゝよ記ちれとる故よ。とく見れず。妙おる事もみ多し。書紀も漢文を飾はとて。ちらしらをちれみ加へらまし故よ。中くふ古文の妙処も皆失終ぬ。ちて上の處く可も。例のひぐ。このせ為る物ぞ如此有ず。上件種くも事も。みお彼神を驗賜もむとも御所為おるおと。此一語ふて著し。今云師の此段も妙処を見得られとる。解状も妙おること。今称へむとも。はよ心餘りて。言よ演がとし。此も人も親をおりて。子を長ら知まは人も。自然よ。今己ぐ思ふ如く。此解の言よ絶て。今おむる道を知り。人の師と別りて。弟子を教ふる道を。辨ず得ざらむ間く妙おるおとを悟り故べし。ちも有れど。人も師と別り親とおり。其子まと弟子を教ふる道を。辨ず得ざらむ間も。親はと師の。然る愛しみの心。裏よ有れはは事とも得知ざる物おまぞ。是乃と師と親とおれはは人も。常よ心得ぢき事ふざ已ける。

於是握其大神出御髮而。其室屋出每椽結著而。以五百引石。取塞其室戸而。負其御妻須勢理毘賣而。取持其大神出生大刀生弓矢。及其天沼琴而。逃出出時。其天沼琴拂樹而。地動響矣。故其御寢出大神。聞驚而。引仆其室屋矣。雖然。解結椽出御髮出間。遠逃矣。故爾迄豫母都平坂追到而。遙望而。呼大名牟

遲神(ヂノカミヲ)而(テ)謂(ノリタハク)曰(ソノイマシレガ)。其汝出所持出(モタルモチ)。以(ニ)生大刀生弓矢(イクタチイクユミヤヲ)而(テ)。汝出庶兄弟(イマシレガヤヽアニオト)者(ヲバ)。追(オヒフセサカノミヲニ)伏坂出御尾(ヲニオヒハラヒカハノセニ)。追(ニ)撥河出瀨(テオレナリオホクニヌシノカミトヤタナリウツ)而(テ)。意禮爲(レクニタヽノカミトテヲソノアガムスメスセリ)大國主神(ニ)。亦爲(ニ)宇都志國玉神(シクニタヽノカミトテヲソノアガムスメスセリ)而(ニ)。以(ニ)其我女須勢理毘賣爲(ビメレムカヒメトテニ)嫡妻(ウカノヤヽノ)而(ニ)。於(ニ)宇迦能山出山本(ヤヽモトニ)。於(ニ)底津石根(ソコツイハネ)宮柱太知(ミヤバシラフトシリニ)。於(ニ)高天原(タカヽノハラヒギタカシリテヲレコヤツヨト)冰木高知而居(ノリタヽヒキオホナムギノカミカヘリヽシテノチニカヨヒ)。是奴耶詔矣(ヤツヨトノリタヽヒキオホナムギノカミカヘリヽシテノチニカヨヒ)。大名牟遲神(ヤツヨトノリタヽヒキオホナムギノカミカヘリヽシテノチニカヨヒ)還坐(ヤツヨトノリタヽヒキオホナムギノカミカヘリヽシテノチニカヨヒ)而後(ヤツヨトノリタヽヒキオホナムギノカミカヘリヽシテノチニカヨヒ)。通(ヤツヨトノリタヽヒキオホナムギノカミカヘリヽシテノチニカヨヒ)坐其若須勢理毘賣命(マスソノワカスセリビメノミコトニ)出時(トキニ)。於(ニ)

其社出前有石。其上甚滑也。卽云滑磐哉矣。故其地云滑狹也。

（ソノヤシロノマヘアリイハソノウヘイトナメラカナリスナハチイリタヒナメレハナルカモトキカレソコヲイフナメサト）

握御髮ハ。御頭の虱を取居をㄗおれど。御髮を握ㄐた。本をㄗ便あㄗ。○椽ハ。師云字鏡ㄐ樽。櫨也枅也。太利木。まさ（佐志乃太利木）とㄟのり。和名抄ㄐは。釋名云。榱在櫺旁下垂也。兼名苑云。一名橑一名椽。和名太流岐（楊氏漢語抄云波閇岐）と有て。今世ㄐも多流紀と云ㄔど。多理紀ぞ理優れど。字鏡の訓ㄐ依ばし。○結著は。師云卧坐御髮を直ㄐ屋ㄊ椽ㄐ結著むた。

程遠き心ちにまだ。此は別ㄐ緒を髮ㄐ結び續て結著とせむㄅ。然れど其ㄊ中くよ。くゝ〳〵ちく聞も見まだ。直ㄐ御髮を結著と見て有ㄐむ。今云。守く優れと神れぞ密ㄐ承り傳。さるおとㄟのり。然れば此大神の御髮の。椽ㄐ結著るむㄅり。長ㄅㄗれむ事ㄊ。然も有べき事ㄐり。さて如此爲給ㄐ所以ㄊ。此大神の御寢坐る間ㄐ。此處を遁去むと思にㄅら。跡をㄗ追來坐むことを恐まて。其を留奉年ゲ爲ㄐㄗ。其事次ㄐ見也。○五百引石ㄊ。上ㄐ千引磐とㄟのる類ㄐり。○取塞は。師ㄊ登理佐閇氏。と訓れとㄐ依ばし。師まさ云。俗語ㄐ。人の鬱ㄐおどにるを。傍をㄗ取りさㄐるとと云も。是をㄗ出さㄐ語ㄐり。上ㄐ以千引磐引塞其坂路。とㄟのる處ㄐ注せるゲ如し。第二十一段の傳見べし。○生

太刀生弓矢は。師云生は天神の饒速日命に授賜へる十種の寶に。生玉足玉あり。神祇官に坐す八神の中に。生魂足魂と申すあり。はた生嶋足嶋。生國足國。また出雲國造神賀詞に。今日能生日能足日爾。などもある生にて。皆命長く生る意なり。足は。満たらぬことなく足ふ意なり。扨て此は執持主の。命長く生ほき徳ある太刀弓矢なり。右の如く。生某と云には。みな足某を並びたるに。此には生のみにて。足の無きは。生に足をも兼係意あるべし。加茂大人は。右の生魂足魂生國足國は。共にその和魂荒魂を分てるなりとぞ云れし。抑今豫美國にして。此物を得給ふは。例の凶をも吉をなほしたまへりぞ。○其天沼琴其とは。上に其大神之を有承て。同其大神之なりと師の說れ

あるが如し。天とは。此も師說の如く。何にても其製狀の天上物に同じきを云。第五段の傳見べし。沼琴と云沼は。天瓊戈を。記に。天沼矛と書たる沼と同じ假字にて。瓊を云ふ古言なり。然れど沼琴は玉琴をも云が如く。瓊を飾付たる琴なり。天沼矛と思ひ合せて辨ふべし。然るを記傳に詔と誤れる本に依て。詔琴と為て。解れたる係說は信がたし。されど。許登と云名義を解れたる說は。信ないひ依べき說どもなれど。今は詔字に就ての說は省き捨て。琴の說のみを此に注しおく。扨て許登てふ名義は。師說に言所なり。所を登と云例多し。上に云り。さて登杼を切れど登となる。留を登麻流とも云が如し。然云ふ由は。まお古に何事にまれ。神の御心を問むとて。其命を請申すには。必琴を彈り。于時其神。琴上に降來坐て。人に著りて。命を詔

給ふ。此事は。訶志比宮段ふ。證等を舉て。委く云を合見て知ぢし。仲哀天皇巻は傳見るべし。はゝと武烈天皇紀の御歌ふ。舉騰我瀰儞。枳謂屢箇磑比謎と云る。上一句半は。影と云む序よて。琴頭ふ降來て坐く神の御影。と云意よ連とるふ。此等を以ても。右は旨を知ぢし。かゝれば。琴と云名は。神の來て詔言し賜ふ所と云意あること著し。と有ふ從ふ。ゐし。ふ。此器は事ふ就て。謂ゆる倭琴の事をも。種〻言れと。ゐ說ども有を。そは既よ。第五十四段の傳ふ注せりき。合せ考ふべし。

偖まと師說ふ。今かく。太刀と弓矢を琴とを取持て。逃出とるふ。其中よ。太刀弓矢は戎用ひし事は。次文ふ見え。ゐるふ。此琴の用は見えぬ。ゐどゐ拂樹而地動く事を云む料のみよ。此物を舉むは。作物語ふどよよそ。然ることも有ら。ゐ。寀錄ふは。ゐり設れて云ぢき謂ふし。まと如調は絃琴所治天下と云ふと。記中よあれど。其は譬ふまぢ。此よ由ふくれむ。然れど是を取持て出給ふふと。何の由とも聞えがとし。故熟く思ふよ。上代よは。夫婦は結びを別去よ。必女の親は方を卍。聟ふ琴を與ふて。其を永く夫婦の中は契とせし事ふぞ有ゝむ。其詳ふる據ハ未見當ら。ゐど。吾妻を云名は有も。此故ふるべく思ゆ。後までも。倭琴よ此名あり。此を中比。東國とり奉卍し事有し故ふど云說は。名よ付て設とる妄言ぞかし。ちて今此琴を取持て出賜ふは。須世理毘賣を妻とする。表物とする。ゐ。然れぢ次文ふ。父大神の詔ふ。其汝之所持之以生大刀生弓矢云〻とあゐは。太刀弓矢は用を云ひ。次ふ以其我女須世理毘賣爲

嫡妻とある所ふ琴の用をば籠とふ所なし。偖夫婦の中を絶ぜ紀ふれ。其表れ琴ぞ。婦れ方ふ返し渡せしふるぞし。上の豫美国段ふ。女男神各對立而度事戸ぞあふも。此と合せて思ふ。表の琴を女神の方ふ返し度紀と云意れ言ふるぞくや。許登れ言所れ暑ぅまる名ふふふ。上ふ五百引石を取塞室戸と云ひ。其外も彼段と此段ぞ事のさふ相似とる事多きを思ひ合ふ。さて此大名牟遅神れ今豫美国とり帰りて国造坐ぞれ本彼上れ豫美国段ふ国未作竟と為る。其業を紹給ふふる。下ふ委く云ひ如くふまば彼段ふ女男神離別て未竟と為て紹ふ。れまぞ彼度事戸と今琴を取持と遥ふ相應ふて妙ふる理ふふ事を思ふ。但しかの伊邪那岐伊邪那美大神の御時ふ現ふ琴ふ返し度ふ給ふふれ有まじれども。然云て夫婦の中を絶ふ。とくふれる詞を以て語傳ふる物ぞ。河海抄ふ。和琴伊特諸伊特冉爭御時令作出給云くと云るれ。拠あるぅ。もし古き傳へふらぞ。少し此ふ由有てきこも。ぞ言れとふ甚惜き考へふまどめ。此も信ぐとし。然も有らぞ。此御琴れ何の料ふ取持て逃出給ふる形らむと云ふ。彼天沼矛れ瓊れしも彼處ふ云る如く。天神れ神霊の璽と付賜ふ巳と通もるふ合せて考ふふふ。此琴れ須佐之男大神れ殊ふ愛ちみ給ふ器ふて。その飾れる瓊はしも其神霊れ驗と付給ふ巳れむを国作堅免て。大国主と成むふて。此大神の神霊ふ頼らぞて大造之績の建はじき由緒を所思坐て。御霊を承賜ハる璽れ器とせむ料ふ。此琴ぞ取持給ふふるぞし。然ふれ。此国土れ元とり須佐之男大神

の治看して、作堅給ふべき由あるよ。上件云、謂はゆる豫母都国より入坐るを、遺し置給へば御子神等の造堅給ふと云へど、云へど、おわ大造之績と云ぞ。ゆえに功ある立ざ已々むる故ふ大名牟遅神の一向に須佐之男大神の御魂を承賜らむと物し給へる事と所思也。其由あわ次々より云を見て知べし。出雲風土記ふ飯石郡琴引山古老傳云。此山峯有窟裏所造天下大神之御琴。長七尺廣三尺厚一尺五寸。又在石神高二丈周四尺故云琴引山と云ひき。此山に鈔ふ在來島郷由來村山頂有權現窟ふ在し琴に此ふる御琴と異ふるぼ々きど。因ふ記し出ぬ石神とは神の像しとる石と聞めれど。今世まで存ふ。また御琴に。石とは言ぼれども。大名牟遅神の御世をり。此風土記を記せる頃まで存むふに。石より等しき物ふらぼに。有經べくも非ぼ。此も今より在や知らぼ。

○拂樹に。師云。紀邇布禮と訓ぼし。俗ふいふ突當ふ。高津宮段ふ。水潦拂紅紐をも

ふの。○地動響矣に。本より動鳴とのるを。下の師説ふ依て。熟當ふ字ふ替とるふり。都智斗々呂伎々と訓ぼし。此言に前の。伏汗氣而蹈登枵呂許志とある處ふ注ふ。第五十五段に傳見るべし。師云万葉ふ。動響とも。響動をも。書るはみふ斗々呂と云處ふ。○聞驚而に。師云上より。須佐之男命。天ふ參上ふ万ふ時ふ。山川悉動国土皆震爾天照大御神聞驚而とのるとに。此に聊異ふて。睡坐るぞ。驚ぬて御目の覺給ふを云ふ。凡て物の音ふぞふ驚くふは非で。只ふ目に覺る様も。驚くと云ふ。物語文ふどより常多し。今も或国人の。然云を聞しこと安藝備後ふぞの国々ふてに。凡そ眠りき。其国に忘れと。○今云。さむるを。驚くと云を其国人ら云。垂仁天皇紀ふ寤と

めのアヒ万葉四ふ夢ハ相て苦有ゝアヒ覺きて搔探れども手ふも觸ず是よて明ゝし。○引仆其室屋とて師云かハ椽毎よ御髪を結著とるをて知し看ちでふを驚きて。起立て出給ふのらふ御髪よ引れて室の仆ふ〳〵犯アヒ。○雖然とは師云如此ていアヒ勇猛き御勢力ふては何處までも速よ追及給ふぢきふをどもを云れアヒ。○遙は師云波呂婆呂爾と訓べし。皇極天皇紀の謠哥よ波魯波魯尓漏尓於忘方由流渠騰曾枳拳喻屢万葉五よ波漏波可毛ふどあアヒ。○望て師云加茂大人ハ美佐氣氏と訓きとるよ依ぢし書紀ふどよかゝる望字を〻ハルを訓を付されども此言とし〻ふ云ふを見ず取ゲとし。万葉一ふ數〻毛見放武八萬雄とふる言。

此字ふをく當れアヒ。振放見と云も同意ふゆ。○呼は余婆比と訓ぢし。余毘を延とる言ふゆ。師云豫毋都平坂て上よも見むて。豫見国と顯国との交堺ふまて此大神は此堺よアヒ此方ふは越出給ふこを能たゞ故此處ふして遙ふ望て呼賜ふふアヒ。今云此大神の此堺を越出給ふこと能ざるて伊邪那岐大御神ハ千引石を引塞給ふ所よ成坐所八衢比古八衢比賣神まと投給へる御杖ふ成坐所久那斗神湯津石村ハ如く塞坐して防護り給へてあり其て道饗祭ハ祝詞よ大八衢尓湯津磐村之如久塞坐皇神等之前尓申久八衢比古八衢比賣久那斗止御名者申氐称辞竟奉久波根国底国与利麁備疎備來物尓相率相口會事無氐下行者下乎守理上往者上乎守理夜之守日之守尓守奉云〻と有をもて知べし。委くて第二十二段の傳よ注せるを見ちて此神等の然守り給ふ堺をしも大名牟遲神の往來し給ひまと須佐之男神よ属て彼国よ名牟遲神と共ふ來給へるて入坐所須世理毘賣命の大名牟遲神と共ふ來給へるて

いのふと云み上み注る如く大名牟遅神の彼国ふ往坐
るは大屋毘古神の御議よて八十神の難を遁れて須佐
之男大神の稜威の御霊を幸しめむとの御態なまで壽
別なり、まさ須世理毘賣命の彼国へ入坐るも此を上よる
云る如く大御神の詔として須佐之男神ふ属給へる
を思ふよ此神もなむらく彼国よ入て大名牟遅神の往
坐ゐ待おゝ為る趣よ佐ゝて共ふ將て帰れ夫婦となり
て共よ功を成給ふべき潑き理ある事と思ゐるまバ是
まさ今云ふ限
ふ非ゞのし。○庶兄弟とは彼八十神を云ふ。○坂之御
尾は師云山の坂路の前乃長く延は牙さる處を云れる
ぼし。御は眞よ同じ。○河之瀬は師云坂ふ御尾といひ河
ふ瀬と云るは為ゞ詞の文ふて實は為ゞ坂ゞ河ぬれ。偖
それ坂も河もまさ詞の文りて實はうゞ道の行手ふ此
處ふても彼處ふてもと云乙ゞなれ。山といはで坂といひまさ河よも瀬ゞ

云れ、みな道路よ就て然るを如此言なせるは古文の麗
云ぬり、瀬も渡瀬なり
美き趣なれば坂ふ伏と云ひ河ふ撥と云も言をかず
て文を成せるものぞ。○意禮は師云人を賤め詈稱なれ。
記中白檮原宮段ふ兄宇迦斯をも詈て云ひ日代宮段ふ
熊曾建をも云れ。書紀よ右の延宇迦斯を云るを爾と書
て此云飫例とあれば神代紀敏達天皇紀なぞふ爾を
も作れ。你も介ゞ同と字書よ何り。枕冊子ふ田植る女の謠へ依歌よ。
郭公ゞ意禮ゞ加夜都ゞ意禮鳴てぞ我も田ふ立お。此も女心
よ田ふ立お勞を苦みて郭公を詈さる詞なれ。中昔の軍
記などよ人ゞ詈て夜意祇と云乙ゞ多し。是も夜も呼出
去辭意祇も此と同じまさ今俗言よ詈て起をさちおま
行をもきおまなゞ云も立おま行おれふて此の意祇な

るばし。然るを轉して。まさ拉おつと。行れつとあども云、
ゴ。まさと今。世の俗言ゴた。自意礼と云ひ。人を罵ゴ。己をめ
我とも云た。古。ちて今かく詔て詔ゴ所以た。下是奴と
を根反あゴ。
ゴる處ゴ云む。○大國主神。名義た。師云。天下を伏ゴて。宇
志波久神と云意あゴ。其處を宇斯波久人ゴ宇志と云。主
中主神の処ゴ。宇都志國玉神。宇都志とた。師說れ如く。
云るゴ如し。
根國ゴ云て詔ゴ御言ある故ゴ。此國土を指て。顯見國
とは詔ゴ。其は多く。此大御國の事とれみ見むはあゴ
狹し。根國ゴ對ゴと御言ゴまた。廣く大地全ゴ係まゴ。
玉た借字ゴて。古語拾遺ゴ。顯國魂神と書とる如く。御靈
あゴ。偖かく似多る御名を。二ゴ重ゴて詔ふた。如何と云

ゴ大國主とは。此天下万國を作堅ゴて。其を宇志波久意。
顯國魂ゴた。國經營る功業ゴ成竟て後ゴ。顯國御靈れ神
ゴ成て。天下ゴ其恩賴を蒙ゴむる神と云意ゴて。此二名
た此處ゴては。未此神の御名ゴは非ゴ。然神と爲ゴと教
命せ賜ゴるゴ。是ゴ須佐之男大神の稜威れ御靈を幸へ
賜ゴ處ゴた有ゴ。然まだ大名牟遲神れ國作竟給へる
て。幽冥事を治看ゴ事と成ゴは。既く此ゴ須佐之男大
神の御詔ゴ。後ゴ。宇都志國た。皇美麻命ゴ避奉り
產靈大神れ勅命として。經津主神。武甕槌神れ降めて問
せる時ゴ。我を云くちて治ゴ賜たく。吾た隱りて侍たむ
とた白給へるゴ。其た第百十五段
ちて後遂ゴ功業を
とり。次くの傳ゴ注ゴを見るべし。
成て。此教命れ如く爲給ゴ故ゴ。御名とた爲ゴ。

師説にいまゞ糊のならば此れ己が説と合せ考ふべし。○其我女師云ふの比賣神今は大名牟遲神ふ屬從ひて坐故ふ其と指て詔ふ処也。○嫡妻に師云宇鏡よ嫡適牟加比女を見え書紀よ多く正妃と云ふ也。此等ふ依て訓法し牟加比に正く夫ふ對配意処也。物語文よ今の妻に生る子をむろひぢらと云るに先妻と別々て今妻を云へれど是も本は嫡妻腹を轉れるよや。○宇迦能山師云和名抄ふ出雲国出雲郡宇賀郷あり此郷の西ふ云ふ也て出雲御埼山と云まで連る也。鰐淵山と云是ふあり。今云宇迦山に御埼山を於くきて只峯に別よ立と也と通も其に第百二十三段杵築の処よ引る風土記抄の説を見て知べし。さて此郷を宇賀と云由に第百四段よ見も。ふを見べし。○於底津石根宮柱師云式の祝詞どもに下都磐根爾ともあ也。凡て上代ふに神宮も人の舍宅も伊勢神宮ふぞに製の如く地を掘て柱を立る故よ此稱辭ふ云る処也。今世よも銀ぐ家よに是あり掘立と云ふ也。地上ふ石居をして柱を立るに後の事処り。石根に故ふ礎をに依ふに非ず。地底ふ本を也ふ云る石根まで深く掘て立ると云義ふ也。於高天原云くに高きを云と對へて見べし。其に柱の立るぐ堅くに云て動処れき由ぞ。○太知は。本よは布刀斯理とありき。師云祝詞等ふ太知立とも太敷立とも。ぱと廣知立ぞも廣敷立とも云ふ也。其に加茂大人説よ祈年祭詞よ皇神能敷坐嶋能八十嶋者云く万葉二ふ天皇之敷座国ふぞ知坐ぞ敷坐と云ふれば知と敷ぞ同じと有也。偖ふ此稱辭を。

古來多く柱の上をけみ意得れど。然ふ非ず。今考るふ。万葉二ふ。水穂之国乎。神隨太敷座而云く。はと一ふ。太敷奇京乎置而云く。はと二ふ。飛鳥之浄之宮爾神隨太布座而云く。外れどなる例を思ふよ。宮柱太知も。其主の其宮を知坐を云ふ。太も右の万葉ふ。柱ふらで。国を知坐ふも云、れど。多く廣く大地ふと云稱辭外。太御幣太詔戸太占ふども云。故廣知をも云るぞかし。かくまば此語た。專柱ふ係るよた非ず。其宮ハ主ふ係れる語ふるを。布刀と云ゞ。柱ふ縁なるゝら。宮柱太とた云のけて。兼て其宮ハも祝ふ依物ふ。万葉二十ふ。麻気波之良宝米氏豆久礼留等乃能其等云く。神代紀ふ。其造宮之制者。

柱則高太云く。万葉二ふ。眞木柱太心者云くふぞ。柱は太を貴ぶふ。縣居大人、説よた。知た數よて。柱も千木も。その繁きを云。祝詞ふ。瓶上高知と云ぬ。長高き酒瓶どもを。繁く並、とるを云よて。知べし。を有れども此説た心得ゞ。まだ結事記ふ。此称辭三処ふある。みふ布刀斯理とれみ有て立と云言ふし。知立と云ふた。繁く立とも。べれ。れど。其を繁をのみ云てた。語成らゞ。其外此前後よ引く。万葉ふぞふある數も。繁よては通えぬぞ多き。宮柱太數坐と連とる。坐よてめ。主ふ係れる言ふる事を知べし。但し瓶上高知た。右ハ説よてをく聞もれども。他の例よ合ず。故思よ彼は高とのみ云てた。調とらぬ故よ。千木高知と云ふまを。ある古言よれらひて。知てふ言た。輕く添とるふても有れむ。万葉一ふ。高知也天之御蔭。天知也日御蔭。をを。知と對へて。調をふさむと。ふ。知を添とりとふそ聞もれ。さまど此等の知意た。猶をく考べき、れめ。

ちて此稱辭た。万葉一ふ。御心乎吉野乃国之花散相秋津乃野邊爾宮柱。太敷座波云く。はな

と云ふ。眞弓乃崗爾。宮柱太布座。御在香乎高知座而。まゐ六す。續麻成長柄之宮爾。眞木柱太高敷而。まと山代乃鹿背山際爾。宮柱太敷奉。高知爲。布當乃宮者。万ゐ二十ふ。可之婆良能宇禰備乃宮爾。美也婆之良布刀之利多氐くゝふどの卍。○於高天原とは。師云滾くと云むとて。於底津石根ゑと云ふ對ゑて。ゐぐゝ高知こゑを云ふ古言ふ卍。大祓詞ふ。高天原爾耳振立聞物止馬牽立氐ゑてのるも。ゐぐゝ馬ゑ耳高く振立と云ふと如卍。此を高天原ふ坐神さちの耳振立と心得るゑ。古言を知らぬもの如卍。本ふ此ふゑ氷椽ゑ書ふを。下ふゑ氷木と作り。椽は混はしれまむ。氷木と作るふ依○氷木ゑ。師云。式の諸祝詞ふ多かるは。悉く千木ゑ云卍。常ふも然云ふるを。古事記ふゑ三所ふ出とふ。皆比岐ふ卍。今云。此ふ縣居大人の。此氷字は垂字を字誤まるふて。是も知岐と訓べし。知岐ゑ。卽垂木の多理ゑ約ゑ。知と云るふり。ゑ云まふ。説ゑ非ゑ辨らまとる説有り。記傳ふ就て知るべし。和名抄古本ふ。辨色立成云。榑風板比宜楊氏漢語抄説同。ゑてのる卍。流布の板本ふゑ。比宜と云ふことふくて。和名抄字ゑてり。大神宮延曆儀式ふも。正殿一區云ゝ。上榑風肆枚。長二丈八尺。弘八寸。厚四寸。號稱比木と見ゑ。同外宮儀式ふも。比疑高知と見えと卍。此等ふても。氷字誤ふ非ること明れし。ちて名義は。氷木千木共ふ肱木ふて。其比知の下を省きると。上を省けるとの差ゑみふれむ。本一ッゑ名ふる故ふ。通はして云ふふ卍。和名抄ふ。枅比知岐。功程式云。肱木。とあるは別物ふり。凡て物の形ゑ。〈如此く如ふを比

知ぎと云。手の肱も此意以て名けたり。はと肱金肱折れども同じ。其比ためと布理の切りと云ふて。布理とは。右の形の如く本は一ツにて斜に左右へ末の分れたる物を云なり。和名抄に方言云河東謂樹岐曰杈枒。和名末多布里。然れど云是なり。振分髪と云も頭上より左右へ分たるちまたを云。又俗に道程なきを云に。此處と彼處との中央處を布理分と云も。此より出たる物の正直からぬを布理の有と云も此より出たり。さて此氷木と云物は。上代の家造りに。屋の左右の端に有て。其本は前後への軒よりして上りて。棟にて行合ふを組違へて。其末を長く上へ出したる物にして。其棟より上へ高く出たる處を。氷木とは云なり。或人伊勢神宮の千木の事を論ひて云。貞和餝記に組目上謂千木。組目下謂搏風とあり。後世は千木をば別に作る社もあれども。伊勢にては今に搏風の末を切らば直に千木に用るなり。さて甚重き故に風穴を明るなりと云り。さも有べし。其は棟より下にては。即多理木と並て同じさまなる故に。古事記には椽字を當たる屋の左右の妻にては。搏風と云物なる故に。書紀には其字を當られたり。然れども是らは棟より下にての名なきぞ。共に氷木とは叶はぬなるぞ。此千木の端を撥こと。伊勢内宮外宮にて内をそぐと外をそぐとの差あるに就て。会易の理など事々なる云なれば。例の漢意の附會なり。なれ尾張人吉見氏が云る如く。内宮と外宮と状を変たるのみにて。何の意も有べきにて非ず。

○高知とは。本より多迦斯理とあるを。前後に引る書等に依て。此字をのきぬ。師云此もなく。氷木の事のみに非ず。主の其宮を知坐をいふ。高め上の太を同じく稱言なり。續紀に聖

武天皇卽位の時に詔よ。天下乃政乎。彌高爾彌廣爾云々。
万葉六よ。吾大王の神隨。高所知流稻見野能云々。まと自
神代芳野宮爾蟻通高所知者。山河乎吉三。との歌もて意
得ゐし。宮尓と云、れば。宮れ高きを云よ非ず。天皇の。此宮を高知坐ることと明れし。ちて氷木
は。棟上ゑ高く上る物ゐる故ゐ。其よ云かけて。兼て其宮
をも祝と依ゐ。全宮柱太知と云り同じ。万葉一よ。芳野川多藝津河内尓高殿乎。高知座而。まと荒妙乃藤原我宇倍尓食國乎。賣之賜牟登都宮者高所知。武等云々。はと六よ。和期大王乃高知。為芳野離宮者。まゐ吾皇神乃高所知。布當乃宮者云々。是らも皆天皇よ係奉りて云へるを思ふ。ちて
此宮柱云々氷木云々ゑ云は。甚々上代を已定れる宮造
に稱辭ゐ。て。甚も雅と依詞ゐ已。神武天皇紀ゐ。故古語

稱之曰於畝傍之橿原也太立宮柱於底磐之根峻峙榑風
於高天原而始馭天下之天皇と見え。文字に漢風ゐ書ゐせる故ゐいとうるさし。式の祝詞どもゐ多く見えて。神宮ゐも天皇の御殿ゐも申せ已。偖こに宇迦山本に宮は。杵築大社とは別ゐ已。杵築宮の事に。第百二十三段に傳を見べし。大國主命天下を宇斯波伎坐依ゐ
ゑは。此宇迦山本宮ゐぞ住坐ゐむ。○是奴に。師云二字を
連祐て。許夜都と訓ばし。上の意禮に下ゐ引る。枕冊子に
加夜都に。彼奴よて。共よ古言ゐ依ゐし。今かの加夜都よ對へて。是奴に許夜都と云。彼奴を伎夜都とも。阿伊都とも云ゐり。はと杵伊都ゑ云に。誰奴ゐ。夜を伊ゑ訛已云格に同きゐ。是らみゐ。夜都ゐることを知ぬ。さて今世俗語よに。是奴を許伊都ても。是奴は許夜都ゐること明々し。對馬ゐどよてに。今

も阿夜都許夜都曾夜都と云へり。けて上ふ意禮と詔ひ。此ふ如此詔ふる。共ふ裏ふた甚く賞美と依御心もて。故ふ表ふ賤免詈賜ふ外り。今世ふも然事多外を思合せて。其味を知き。凡て上件令寢蛇室云くを。種く此事と。此御言と全同じ御意旨ふり。此御言を宣ひのおしては叶たざる故ふ追給ふり。然るた此まで此御心も顕きば。功を也立給たざら む事を思してふり。はと大国主神も。此時始免て。大神の我を苦免給ふ依た。濺き御心あり。事を知給ひ。○還坐而た。ふれ顕国へ還坐る外り。或人云。上ふ伊邪那岐大神の此根国をり還坐る時た。禊祓ひ給ひ。伊邪那美大神た。豫母都戸喫し給へる故ふ。顕国へた還坐ゲと外由見えと。大国主神。まと須世理比賣命は。彼国ふ久しく坐おれた。彼竈所ふて煮炊ある物を。聞食れむこと著し。然ふ容易く還坐し。まと殊ふ禊祓外態ふ。外し。まも聞えざる依た如何と云ふ。答けらく。此二神の此国の物食とりやざ

食さば。其た知らば。假令食とらむも。上ふ云る如く。此神さちの。彼国ふ往來し給へるた。別ふ依所以ふ依事ふれた。伊邪那美命外。還坐ゲとく思召せると。由縁異外り。まと還坐して後の。禊祓外態た有々依ふ無りしら。知ら祓ど。道理をもて思ふふ。必祓ひし給ひ々むる。其た此ふ用ふ外る故ふ。語り傳へざる物ふるべし。○若須世理毘賣命。若た例外稱名ふて。別外依義外し。○社た。須世理毘賣命外常住ふ依屋代ふ。抑此比賣命た。大国主神の嫡妻ふ坐せば。共ふ宇迦山本宮ふ住給ふ。ふ。かく別ふ御屋代あるた。上代ふた。神等多くは一柱おく。常ふた離き坐依して。通ひ住給ふ依事と聞え。下ふも処く。その趣ふ。○滑磐ハ。奈米斯波を訓。見ある事ども有り。○滑狹堅石おど。の例外。○滑狹た。那米斯波の斯波を約免て。佐を云るふり。

本書風土記ニ神門郡滑狹郷、郡家南西八里ニ云〻とて此傳を記し、故云南佐神龜三年改字滑狹とあり。和名抄ニ當郡ニ南佐とも滑狹とも書て、二郷あるは是なり。風土記抄ニ滑狹、神西、市場、二部、三部、常楽寺、畑村等也といへり。神名式ニ同郡ニ那賣佐神社。今本佐を伎ニ誤まり、風土記ニ依て改む。同社ニ坐和加須西利比賣神社あり。風土記ニ奈賣佐社と云ゲ二社有て、並在神祇官と云ヲ誤は即是なり。風土記抄ニ滑磐石者在神西村岩坪山ニ岩坪大明神、高倉權現之所坐。則祭須世理比賣與大穴持命。則那賣佐社也。神名式考證ニも社記ニ云所謂磐石者在神西、郡岩坪山、岩坪明神、高倉明神、是則祭大穴持命、須世理比賣命、式内奈賣佐、兩社是也と云り。且有神西曰神待之處大穴持命

來通須世理比賣命之時相待比賣于此處也。波加佐社是神待社也。又有羽加佐山と云ア。波加佐社ハ風土記ニ奈賣佐社ニ並出て是も在神祇官と云る社なり。然ルニ神名式ニ此社を擧られざるハ不審。如ハ去と外り。さるハ風土記ニ在神祇官といヘる社の、神名式ニ漏さゞるなり無きなるア。或説ニ和加須西利比賣神社此次ニ並ぶて佐伯神社とあるハ伯佐を下上ニ寫し誤れるなて。波加佐社ニ成ぶしと云ア。然も有ベし。

於是大國主神爲伐八十神而

造城矣。城名樋山出地是也。故八十神者。不置青垣山裡詔而。持其生大刀生弓矢而。追避出時。毎坂出御尾追伏。毎河出瀬追撥而。国作始矣。其追廢出時。追及坐出處云來次。亦比大神出射堀立而射出處者。即矢代鄉是也。亦令殖笑出處云矢内鄉也。

城を紀と訓ゐし。御紀を始め古書ども。志呂と訓ること紀を云名義を加茂大人は書紀ゐ玉城宮とあるを古事記ゐ玉垣宮とあるゐ就て即加紀の畧ありを言ひ谷川

氏も築の畧ある師云必しも後世の城の如くなる多〻この
べしといへり。外ら私ごとも。假そめ。垣もひ廻ぐし。構へある處をごを
も云ふ。稲を積置く処を稲城馬を居しむ。○城名樋山。
る処を牧と云よてもしるべし。
此も本書出雲風土記ふ。大原郡城名樋山郡家正北一里
百歩云〻とて。此傳を記せり。同記抄ふ斐伊郷古城山也。
東北咸山以南小川以西大河也俗呼云劔埼と云へり。○
青垣山此も下ふも往く出れど一ぢの山名ふも非ぢそ
は師説よ。青山は国の垣をなりて周廻れるを倭建命は
御歌ふ多く那豆久阿袁加岐夜麻碁母禮流夜麻登志宇
流波斯と御詠まし。万葉一ふ。疊有青垣山云〻。神賀詞よ。

出雲国乃青垣山内爾。下津石根爾宮柱太敷立氐云〻ふ。
ぢ猶ほの。山と云ひて。唯青垣とのみ云へる例も万葉六ふ。
芳野離宮者立名附青墻隱云〻。ぢほの法是ふりとほの。眞竜
云。青も青香山青菅山は青の如し。此所も須賀の宮所を
圍む山を云ふれど。東北よ須我山林垣山西南よ高麻山
船岡山ありて。堺を廣く遠く八十神を追撥ふを云。○持其生太力生弓矢云〻。師
云ふ〻ふて。生てふ德ほのらもれ多ふ。○毎坂之御尾云〻。
毎河之瀨云〻。師云二の毎は。處〻ふて戰賜ふ度毎ふ勝
給ふと云ふとを。如此雅ふ言ふせるハ。まと古文の巧後
世は及ぢぬ所ふ。方葉十八よ可波乃瀨其等尓とあり。○国作始矣ハ。師
云下よ此国作賜ふ事の定ほの。作とも。卷首ふ修理とほの

ゟ字の意ゟ。抑此国作れ事も。上の豫美国段ゟ。伊邪那岐命れ。吾與汝所作之国未作竟故可還と。伊邪那美命ゟ詔ひしゟぞも。云〻れ所以ゟて。得還坐さで止ゟしを。其伊邪那美命ゟ依坐て。豫美国を所知。須佐之男大神れ。御齋ゟ坐ゞ此神れ。其大神れ御威霊ゟを。て。御威霊ゟを。るとも。生太刀生弓矢を得給ふ事ゟど。上件事ゟい。彼業を紹て。功を成給ふゟと。彼と此ゞを相照し考へて。深き所以ある事ゟ知べし。○來次は。伎須伎と訓ゟし。下ゟ引く支受支社を。式ゟも來次と作き。大嘗會の齋紀主基の主基を。次とも書ゟり。ちて此來次の事も。本書風土記ゟ。大原郡來次郷。郡家正南八里。抄ゟ。來次郷。西日登。東日登。寺領。中谷。來次市等五所也と。ゟり。和名抄ゟも同郡ゟ。來次郷と出とゆ。所造天下大神命詔八十神者不置青垣山裏詔而。追廢時此處追次坐故云來次と。ゟるを採れ。但し処追次坐の四字本どもゟ。義迫以生と。ゟるは写誤ゟ。今も眞竟ゞ解ゟ依て。改めて引とり。追次も追及ゟ。伊邪那岐神を。伊邪那美神の追坐ゟ事ゟ。古事記ゟ。追斯伎と。ゟの。志伎ゟ須伎と云るも。書紀ゟ。味鉏高彦根命とあるを。古事記ゟハ。阿遅志貴高日子根神ゞあるもて知べし。此等を考へ合せて。追及云〻と文を成。道を追及ぶを斯久と云と。師の言ゟゟゟ如し。八十神ゟ追及て。來給へゟ地ゟる故ゟ。來次と云由ゟ。俗ゟ追付といふ意ゟり。委くも。第二十二段の傳ゟ云へりき。ちて風土記ゟ。同郡ゟ。支須支社といふ有て在神祇官と云ゟ。風土記抄ゟ。屋裏郷宇治村室大明神也と云。即神名

式ヨ。同郡ヨ來次神社とヰのる是ヲ。大国主神を祭れるゐるぢし。○射垛ヒ。阿牟都知と訓ぢし。和名抄射藝具條ヲ。楊氏漢語抄ニ云。射垛以久波止古路。此間ニ云阿無豆知。今按又用堋字ニとヰの。以久波止古路ヒ。的所ヲ。阿無豆知ヒ。今阿豆知を云。即的を立て弓射る場をいふ。○矢代郷ハ。本書ヲ。大原郡屋代郷。郡家正北一十里一百一十六歩。所造天下大神之垛立射處故ニ云屋代。神亀三年改字屋代。即有正倉とヰの。抄ヨ。并東西三代為一郷と云へり。其正倉ハ。同記ヨ。不在和名抄ヲ。當郡ヨ屋代郷見えず。神祇官とヰる社ヒ中ヲ。屋代社とヰる是ヲ。ヰ。抄ヲ。屋代郷三代村。貴船大明神也とあり。祭神ヒ。決めて大国主神ゐるぢきヲ。貴船を云ヒ。後の非說ゐるべし。○笑

は。和名抄征戰具ヲ。箭釋名云笑。和名夜とヰの。令殖とヒ。戰ひ給ふ時のおとうばと殖ヒ。宇くゝを也訓ヰ。字ゐを む。矢竹を殖生し給ふる所。と云ヰヨも有べし。本書ヲ。同郡屋裏郷。郡家東北一十里一百六十歩。古老傳曰所造天下大神之殖笑給處故ニ云矢内とあり。抄ヨ。宇治。南賀茂。中村。延野。大竹。猪尾。岩倉。新宮。近松。砂子原。立原。大埼等十二所也と云へり。和名抄ヨ。同郡ヨ屋裏郷ヰの。ちて矢代。矢内二ヒ。故事は。必しも此時の事を。ヒ所思ゑど。因ヨ此處ヲ文を成せるゐの。

故其八上比賣者。如先期美斗

阿多波志焉。爾其八上比賣者。
雖率來坐。畏其御嫡妻須勢理
毘賣而。其所生子者。刺挾木俣
而返矣。故其子出名云木俣神。
亦名謂御井神。此者座摩出御
巫出伊都伎奉神也。

八上比賣。師云延佳本ハ神字ノきゼ。前後此名ハ神ト云ふ例無れど無ぞ宜き。○如先期ハ。上ハ此比賣神の八十神ハ答ふ給ふる言ハ吾不聞汝等之言。將嫁大名牟遲神とのる耳ぁまども。彼時ハ既く契約ぁ有ぞぉぉらむ。○美斗阿多波志焉。師云邇ゝ藝命ぁ大御歌ハ。佐禰杼許母。阿多波怒加母用。とある聯ざまと合せて思ふぞ。美斗は。美斗能麻具波比の美斗と同く。彼佐祢杼許と同じ聯ふきぞぁり。阿多波志は阿多比を延ゝふ例ぁ古言ハて。阿多比。阿多布ぁど

を活用言れり。けて神代紀下ふ。幸之はと雄畧天皇紀ふ。
與一夜而娠ま（終宵とも。同紀ふ見や。）奉與一宵とも。與ふど有ふよても。其事ん
知らを多れども。言ん意ん（い）ふど詳ふ思得ぐ。與御手也と云説ふ
どん。痛く誤ふり。はん今世ふ手を掛と云ふり思ひをれ
ふよや。然をど美斗と云で。佐祢杼許母を云るをぐ如何
せむ。強て嘗ふ云ば。彼大御歌ふ。奥津藻邊爾者雖寄と比ば
詔ひ。まと眞寢床毛と云を卍連有を思ふふ。阿多布ん。此
を彼と一ふ寄著意ふらむ。雄畧天皇紀の與字も。共ふ
ける意を取れる外卍。此與字を。人ふ物を與る意ふて。阿
多波須と訓り。と外思ひ混ふそ。
然れど美斗阿多波須とん。一ふ寄會て。御寢所を與ふ云
賜ふ意ふらむ。（須を約とる例の言ふて。是も其物を其
人ふ寄せ著る意ふり出ふ米れど。右の阿多布と。此も本
ん一ふ落めり。まと漢文ふ。不能を阿多波受を訓ん。字書
ふ。能は勝任也と有。意ふて。多閑受と云ふ同じ。故思ふ。
勝任も。本阿多布流の阿を省々るふらむ。不堪を阿閑
受とめ云なを思ふべし。かくまど。勝任ん。其事ふをく至
紀著意。不勝ん。其事ふ得至り著。無意ふるばし。然をど不
能も不勝も。みふ本ん。右の阿多布と一ふ外ふり。○書紀ふ。
納采まと聘ふどを。阿斗布と訓るん。言も事も近々れど
別れ卍。

○雖率來坐は。因幡を卍出雲ふ。大国主神の率來ま
せるふ卍。○畏ん。八上比賣ん畏み坐ふ外卍。其ん下ふ嫡
后ん。甚く嫉妬み給ふふ。大国主神和備て。倭国ふ上坐む
と。將給ふる事有れど。然る事を聞しふ畏み坐るふふば
し。○刺挟刺ん多ぐ輕く添とふ辭ふ卍。○返ん本国因幡
ふふ卍。○御井神とん。師説の如く。此神處々ふ井を作て。

民の利を示し賜ふは御功(イサヲ)なりしに因て稱奉れる御名なるべし。其御社も亦出雲風土記に秋鹿郡に御井社鈔に在佐田といへり。なりて在神祇官と見も神名式に同郡に御井神社とある是なり。なるは出雲郡にも御井社あるなり。在神祇官と見も式に同郡に御井神社とある是なり。風土記鈔此社に有漆沼郷直江村御井大明神也と云へり。なると大和国宇陀郡に御井神社。社なる檜牧村と云に在て今は食美濃国多藝郡に御井神社。なり。大明神を考證に云へり。

各務郡に御井神社。和名抄に同郡に三井郷あり。當国式社考に加納駅を去ること東二里許に三井村なり。御井大明神と云といへり。考證に也三井村北一里餘に稻羽山明神社なりと云るに就て或人云承和十五年の紀に七月美濃国厚見郡無位伊奈波神奉授従五位下と云るは是なりと云り。御母神の稻羽は神なる

を思ふべし。然も有らむ。但馬国養父郡に御井神社外どなり。○名神祭式に御井神社一座とあるは誰社なるらむ。○座摩之御巫は上に也出て且云へり。

第七十四段の傳見るべし。

神名式に神祇官西院坐御巫等祭神は

三座の中に座摩巫祭神五座。並大月次新嘗生井神福井神綱長井神波比祇神阿須波神となり。清和天皇紀に貞觀元年正月九七日奉授神祇官生井神福井神綱長井神波比祇神阿須波神並従四位上とあり。縣居大人説に座摩は本攝津国西成郡の所名にて式に也同郡に同神の社なり。今云此社は下に別に記し出て委く注を見べし。右は神等を祭る祝詞に皇神能敷坐(シキマス)下都磐根爾宮柱太知立(フトシリタテ)云へと云へるに依るに古へ此大神は敷坐(シキマシ)し處に仁德天皇宮作りし給ひて宮中

ゐ齋給ひし故ゐ其後大和山城と京を遷さまても同く遷し齋れて其處を卽座摩と云しあらむ座摩ゝ座て今集解ゐ居とも書れて爲を訓ゐを定ゐ外ゐ然て居も座も摩を借字ゐて井之後と云所名ゐや有ゐむと言れしは宗然る說ゐ卍然るゐまゐ井之塘ゐやとも言まし說て有らむ猶能く考べし其て伊勢國朝明郡ゐも式ゐ井後神社と云ゞ有まゐ卍此社ハいま柿村と云ゐ在とぞ

ちて祈年祭の時ゐ此神等ゐ白ゝ祝詞ゐ座摩乃御巫乃稱辭竟奉皇神等能前爾白久職員令ゐ御巫とある所の義解ゐ在女曰巫也と見え延喜臨時祭式ゐ凡座摩巫取都下國造氏童女七歲已上者充之若及嫁時申辨官充替と見も一本ゐ都字を部と作り巫を加牟乃古と訓ゐハ神之子ゐり さて御巫て此外ゐも神祇官ハ神の御巫御門御巫生島御巫ゐど各別ゐる故ゐ座摩乃とて云へるれり生井神名式ゐ生井清和天皇紀同じ栄井紀ゐも式ゐも福井神とあ卍栄井福幸ゐどて言意ゐもゐ同じ津長井紀式ともゐ綱長井神とあり訓て同じさて此三名て御井神の御名を種くゐ称ゐるゐとゐり綱長井と申ハ井て濱きて水冷やゐる故ゐ釣瓶の綱て長き由を世の阿須波波比支此二神の長き由ゐけて称へとるゐ ゐ第七十四段ゐ委く注せ卍 登御名者白氏稱辭竟奉者ゐて祝詞の定例て言ゐり既ゐ注ゐ卍 皇神能敷坐下津磐根爾考ゐ云右神ゐち彼座摩坐ゐ事この文ゐて知らる今京を建給ひし時園神韓て地ゐ本ゐり宇斯波伎神て社を宮内省ゐ祭ゐ類ゐり さて其座摩て雑波宮の時て事ゐるを大和山城の都ゐても古ゐ準へて かくて称申し給ひゐむこと上ゐ云ゐ如し宮柱太知立高天原爾千木高知氏此言て事て既ゐ第八十六段の傳ゐ委く注ゐり皇御孫命乃瑞能御舍乎仕奉氏瑞御舍て事て既ゐ第六十六段の傳ゐ注へ卍天

御蔭日、御蔭登隱坐氏。考ふるに御は眞ゐり天を覆ひ日を覆ふが為の屋ゐるを、文ゐかく云ひ成せるゐは也とあり、或說ゐ天は雨は借字ゐて雨を防ぎ日を防ぐ由を、かく云成せるゐと云へ也、寔然も有ぢく也。四方国乎安国登平久知食故皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣と云の也。まと月次祭の祝詞ゐも、かく見えとり。ちて臨時祭式ゐ、御井祭を云見え。其祭の品くを見れバ、いと重き御祭ゐり。まゐ御井拜御竈祭とも有て、竈神を一ッゐ祭給ふこをも有也。然るに其品くを、一ッゐ挙さまぢゐ也。師言の如く、井は殊ゐ重くしゐ為き處ゐまむ。誰家ゐも分くゐ隨ひて、此神をば齋奉るぢゐ物ぞゐ。ゐ神名式ゐ、攝津国西成郡ゐ坐摩神社。大月次新嘗。の也ゐまを上ゐ記せる縣居大人說ゐ、謂も依神祇官ゐ坐し座摩神社本社ゐ也。清和天皇紀ゐ、貞觀元年正月廿七日、摂津国坐摩神、從五位下と云り。百錬抄、元仁元年四月十三日、此社の門荒垣等の燒とるゐ付て、軒廊御卜ありしゐと見も。はと和泉国和泉郡積川神社五座とあるも、右五神を祀るをし、彼社記ゐ見も。と考證ゐ云ゐ也。国史ゐ、承和九年十月奉授无位積川神從五位下、貞觀六年三月廿三日授從五位上積川神從四位下、同十五年四月五日授和泉国從五位上積川神從四位下と云ゐ也。和泉志ゐ、今在積川村

○門人岩崎長世。久保田細根。佐藤昌信ら云。おれの十七は巻を。櫻木ゐ勞紀ゐらせて。紙ゐうゐして。其花は咲みてるゐがおと。天の下ゐて也匂はせむとしゐは。美濃国恵那郡附地村ゐ。古くゐより世く村をち名ゐ依。田口慶成。又

其おなじ里長。曾我常昌ら相議ひ。まさ初帙よりひ次くを。
彫刻志ある人くれ功績成合せて。かくは成るふ那む。

197
34
111